

# 二世帯同居における「孫共育」

家事育児協力のための新しい Nice Separation

調査報告書

旭化成ホームズ株式会社

くらしノバージョン研究所

## はじめに

1975年に当社で初めて二世帯住宅を発表以来、今年で35年が経過しました。当初はこのような住まい方にはまだ抵抗感も強く、受け入れてもらうのに苦労した時期もありましたが、同居に関する様々な視点での調査・研究・提案により、親子同居の住まい方のひとつの形として定着するにいたりしました。

しかしながら、その後の社会の状況の変化や同居観の変化等により、二世帯での暮らし方や住まいの形が少しずつ変わってきているように思います。

高齢社会の進展とともに親世帯の高齢期居住への不安、共働き世帯の増加の中で安心して働きながら子育てできる居住環境の問題等々、社会問題としてもクローズアップされてきています。

また、昔は同居といえば息子夫婦との同居が当たり前だったのが、いまでは娘夫婦との同居も当たり前の世の中になり、世帯間の関わり方の異なる同居スタイルも一般化してきました。

そして、同居の理由も、経済的な理由が上位だったものが、家事・育児の協力や親世帯の老後を考えての同居が上位になり、お互いにとってよりメリットの大きい、積極的な同居のかたちが目につくようになってきています。

具体的な住まいの形としても、世帯分離型が多数を占めていた時代から、娘夫婦同居や片親同居に多く見られる世帯融合型の増加で同居形態の多様化の時代になってきています。

また、従来は同居よりも近居を選択する志向が高い傾向が続いていましたが、ここにきてむしろ同居のほうを積極的に選択する傾向も出てきているのではないかと思います。すなわち、近居から同居への回帰の状況もみられます。

このような動きの中で、今回は特に子育て期の同居に注目し、孫を育てることを軸として同居の実態や意識を把握し、さらに近居の場合と比べてどのような違いがあるのかを探ることとしました。

その結果、従来とは異なる今後の同居のあり方が見えてまいりましたのでご報告させていただきます。

最後に、今回の調査にご協力いただいた方々に深く感謝申し上げるとともに、今回の調査報告・提案が今後の同居を考える上での参考になれば幸いです。

平成22年4月  
旭化成ホームズ株式会社  
くらしノベーション研究所

# 二世帯同居における「孫共育」

—— 家事育児協力のための新しい Nice Separation ——

過去の二世帯に関する調査・提案	3
社会背景	5
調査概要	6

## 第一章：近居と同居の違い

1-1. 協力内容の違い	11
1-2. 交流頻度の違い	12
1-3. 交流目的の違い	13
1-4. 育児協力の質の違い	15
1-5. 孫共育の成果	17
1-6. 親世帯が立入らない場所	19

## 第二章：同居における家事集約・協力と居場所

2-1. 家族構成で異なる同居生活志向	21
2-2. 夕食準備の協力・集約	23
2-3. 夫の食事時間がずれる場合	25
2-4. 洗濯の協力・集約	26
2-5. 個人の居場所	27

## 第三章：孫共育のススメ

3-1. 孫共育ゾーニングの提案	31
3-2. 2×NEST（ダブルネスト）の提案	33
3-3. 孫ロッカーの提案	35
3-4. 親世帯への加齢配慮提案	37
3-5. 子世帯への成長配慮提案	41
3-6. 息子夫婦同居プランニング例	43
3-7. 娘夫婦同居プランニング例	45

## 過去の二世帯に関する調査・提案

# 二世帯で分離した生活を基本としながら 家事育児協力の志向も強まる

### ■「二世帯住宅」(1975年)商品化

発売当初の二世帯住宅は、一つ屋根の下に分かれて住むことを解りやすい形で提案しました。すなわち床を境に上下に分かれて住み、2階世帯へは外階段で出入りする隣居感覚の二世帯住宅です。



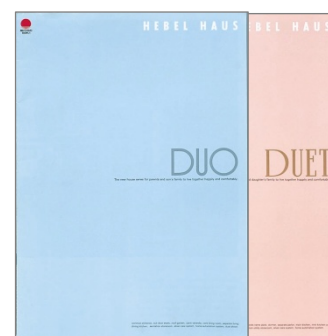
当時のカタログ



最初の新聞広告

### ■「DUO&DUET」(1987年)商品化

従来は息子夫婦と住む二世帯住宅が一般的でしたが、娘夫婦同居への関心の高まりを背景に、息子夫婦同居と娘夫婦同居の違いについて調査しました。同居で最も気を遣う人は息子夫婦では子世帯の妻、娘夫婦同居では子世帯の夫であることが結果としてはっきりと判りました。それを解決するコンセプトを息子夫婦同居(DUO)は「オモテ融合・家事分離」、娘夫婦同居(DUET)は「オモテ分離・家事融合」として提案しました。



### ■「Nice Separation」(1988年)提案

「Nice Separation」とは「生活を分けると気持ちがかくつつく」という二世帯住宅の基本的な考え方を表したものです。過去の様々な調査から、中途半端な分け方だと接点は多くてもいい交流(積極的な意味での交流・協力関係)は生まれにくく、かえって生活をお互いに分けることにより心豊かな二世帯間の関係を築きやすいということを提案しました。



### ■「祖父母と孫の関係」(1997年)調査発表

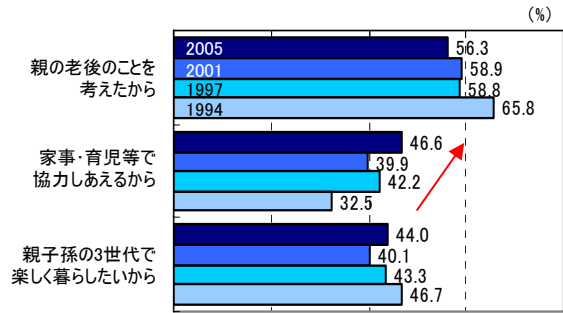
祖父母と孫の両方にアンケート票を配布し、別居と二世帯同居、べったり同居を比較しました。祖父母は別居では孫を叱らない、プレゼントやお小遣いをくれる存在であり、べったり同居では孫をうるさく注意し、孫から必ずしも好感を持たれていない存在でした。二世帯住宅はそれらの中間に位置していますが、別居にはない祖父母と孫の親を介さない関係があり、べったり同居と異なり子世帯のしつけには干渉しない傾向がありました。

当時は近居や融合二世帯といった形態が少なく、別居、二世帯同居とも現在の状況に比べ近居、融合志向が少ないという特徴があります。

■「二世帯同居・この10年」（2005年11月）調査発表

1994年から4回に渡る二世帯住宅の調査を比較し、10年間に渡る変化を考察しました。同居の理由は常に「親の老後」であり、10年間で家事育児の協力志向が強まっている実態を把握しました。

■ 同居の理由

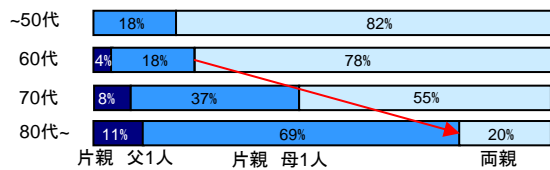


■「親子同居スタイル・多様化の実態」（2007年7月）調査発表

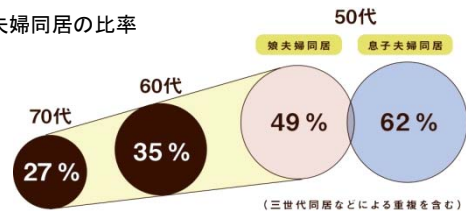
2008年8月発売の「二世帯 f」の基礎となった調査です。

娘夫婦同居は親世帯が若いほど多く、親世帯の加齢と共に片親世帯が増加していく実態を捉え、世帯専用のサブスペースを持ちながら夕食を一緒に食べる「融合二世帯」を提案しました。

■ 親世帯年代別家族構成



■ 娘夫婦同居の比率



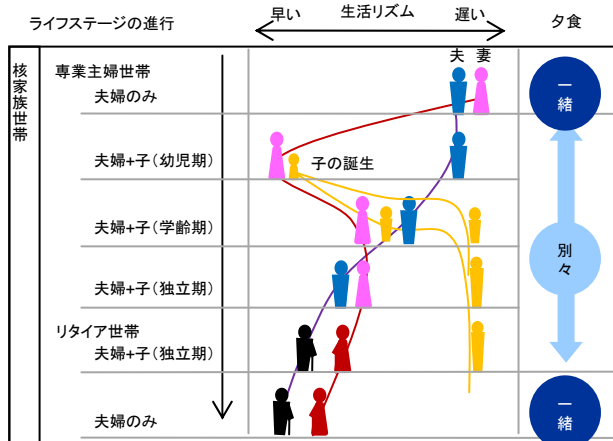
■「家族の生活時間 そのバランスとリズム」（2009年5月）

同年12月発売の子育て世代向け生活提案「+NEST」（プラスネスト）の基礎となった調査です。

子育て期に大きく変わる生活リズムのずれ、夕食の分散化、夜洗濯室内干しの実態を把握しました。

また、共働きの場合に同居の親が居るサポート効果が大きく、家事を母親に集約して仕事に就く子世帯妻の存在を指摘しました。

■ ライフステージの進行による生活リズムの変化



## 社会背景

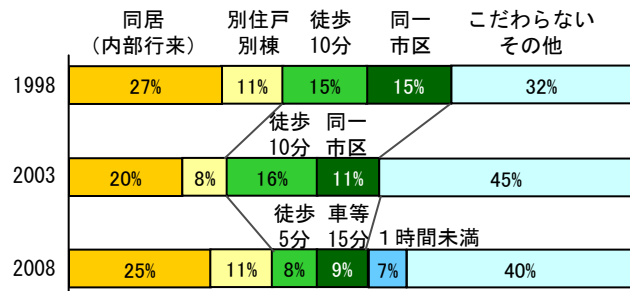
### 近年見直されている二世帯同居

減少傾向であった親子同居は近年増加に転じています。

#### ■高齢期(65歳以上)における 子世帯との住まい方希望

親世帯の世代では、同居または別住戸・別棟の志向者が増加に転じています。

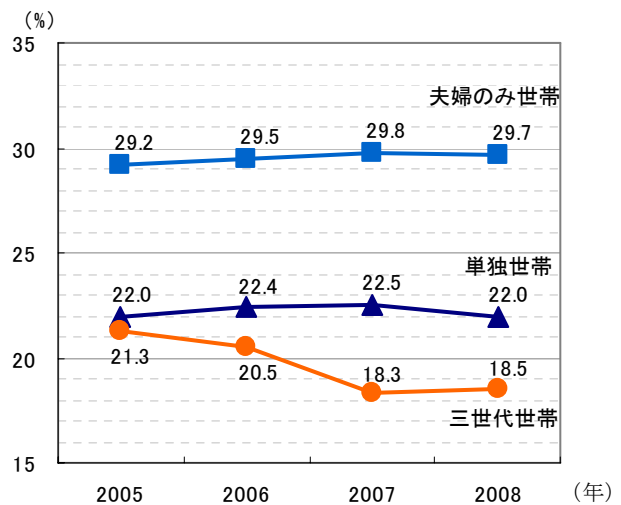
※国土交通省 住宅需要実態調査（1998, 2003）住生活総合調査（2008）より「子がいない」「不明」「わからない」を除いて率を算出



#### ■65歳以上の者のいる世帯の世帯構造別比率

高齢者（65歳以上）を含む世帯の世帯構造では、これまで続いていた単独、夫婦のみ世帯の増加が2008年調査において止まり、わずかながら三世帯世帯の増加が見られました。

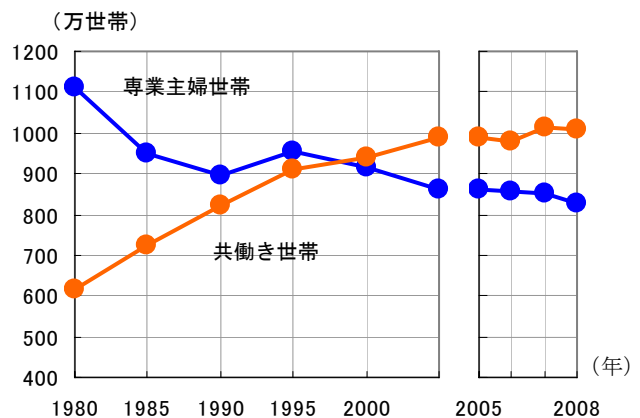
※国民生活基礎調査（厚生労働省）平成20年より作成



#### ■専業主婦世帯数、共働き世帯数の推移

1980年以来子世帯における共働きは増加しており、2000年以降は専業主婦世帯を上回っています。共働き世帯にとって親のサポートは貴重であり、親子同居への志向を高める要因となっていると考えられます。

※男女共同参画白書（内閣府）：夫は非農林業の雇用者。  
労働力特別調査2月（～2000年）労働力調査（詳細結果）の年平均データ（2005年～）



## 調査概要

# 3回に渡り親子両世帯を調査

### ■調査の目的

近年、親世帯においては長寿化によって90代を見据えた住まいへの建替えの必要性が高まっています。また、子世帯においては共働きの増加と経済的先行きの不安により、子育てや家事について親世帯の協力が必要とされています。これらの要因から、親子同居志向が高まり、二世帯住宅が見直されてきているものと考えられます。

本調査においては、子育て期における育児・家事の協力と、世帯分離や家族の居場所といったプライバシーの要求について、実態を把握することを目的とします。

### ■調査概念図



A. 「孫共育に関する調査A-親子の交流実態」

対象：親世帯と近居・同居している中学生以下の子がいる子世帯



B. 「孫共育に関する調査B-同居における育児協力と家族の居場所」調査

対象：親世帯と同居し、中学生以下の子がいる子世帯妻



C. 「孫共育に関する調査C-祖父母と孫の関係2010」

対象：中学生以下の孫がいる子世帯と近居、同居している親世帯（祖父母）

	回答者	親世帯	子世帯
居住距離・建物分離度	近居・隣居 		
	分離同居 		
	融合同居 		

用語の定義：

近居・隣居：居住距離が車等で15分以内（隣接敷地内のものを含む）

分離同居：同一建物内に居住し、世帯別にキッチンがあるもの（独立二世帯＋共用二世帯）

独立二世帯：キッチン、玄関、浴室が世帯別にあるもの（内部で行き来できる、できないは問わない）

共用二世帯：キッチンが世帯別で、玄関または浴室等を共用しているもの

融合同居：同一建物内に居住し、共用のキッチンがあるもの

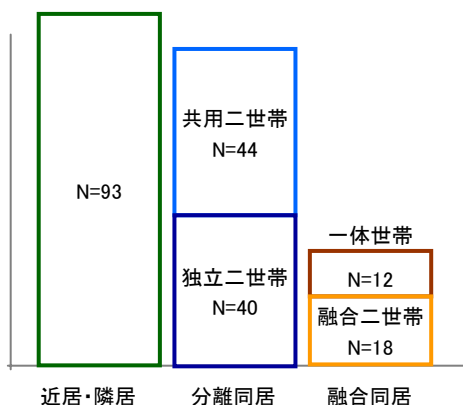
融合二世帯：共用のキッチンのほか、世帯別のサブキッチンが1つ以上あるもの

一体世帯：共用のキッチンのみで、サブキッチンがないもの



親子交流全般について、訪問頻度や目的、立ち入る範囲などについて実態を調査したものです。世帯間の交流についての調査のため、Bの調査と比べ一体世帯型住宅の居住者が若干少ない傾向があります。

■居住距離・建物分離度別の分布



■調査時期：2009年3月

■調査対象：子世帯（夫妻のどちらか）で下記条件に適合する方（有効回答数 N=207）

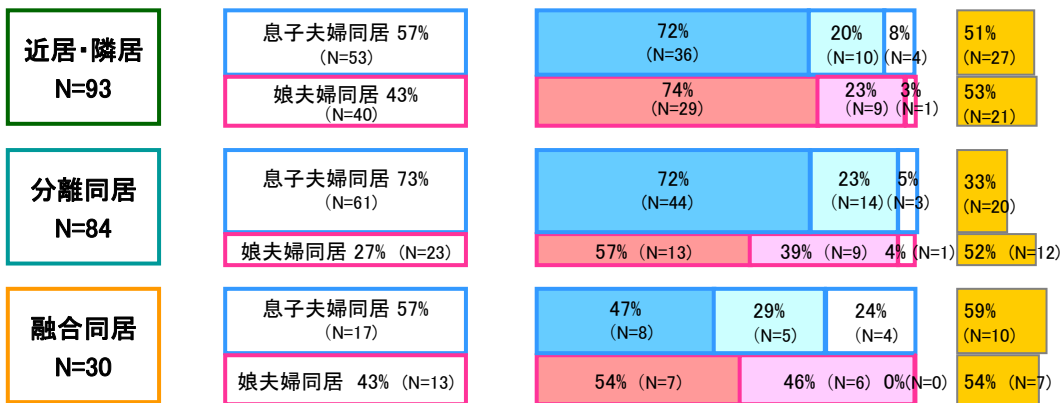
- 1) 親世帯と近居または同居
- 2) 中学生以下の子がいる

■回答依頼送付：自社建築注文住宅の居住者のうちホームページ登録者

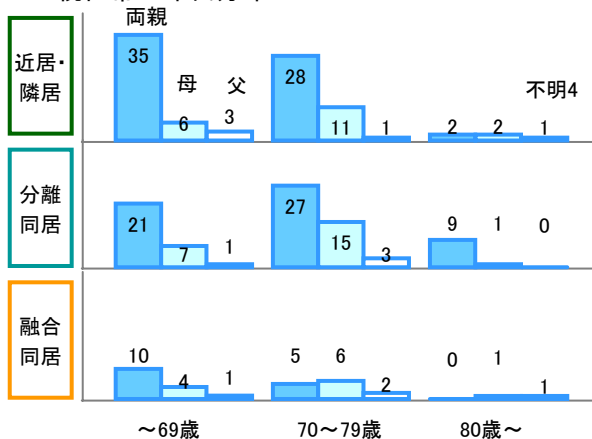
■調査方法：Webアンケート

■調査エリア：自社建築エリア全体  
関東～東海～関西～山陽～北九州の各都府県

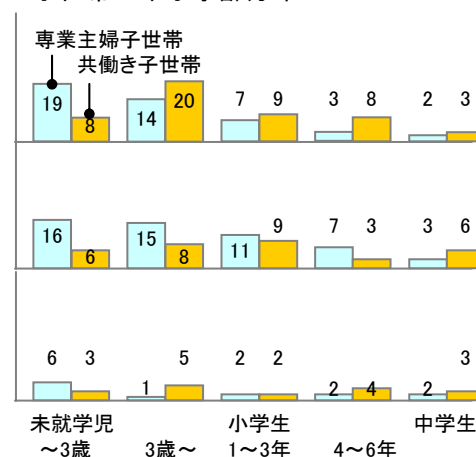
■息子・娘夫婦同居、両親片親、共働き比率



■親世帯の年代分布



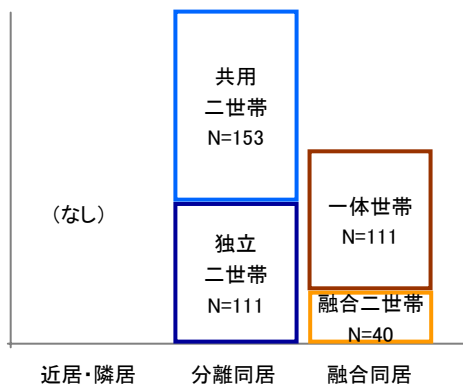
■子世帯の末子学齢分布





同居の子世帯妻に回答者を限定し、育児、食事、洗濯に関する親子協力の実態と、家族がそれぞれの居場所で行っている行為について調査しました。育児協力をしている世代が中心のため、A調査と比べ、親世帯の年齢が若い傾向があります。

■居住距離・建物分離度別の分布



■調査時期：2010年2月

■調査対象：子世帯の妻で下記条件に適合する方  
(有効回答数 N=415)

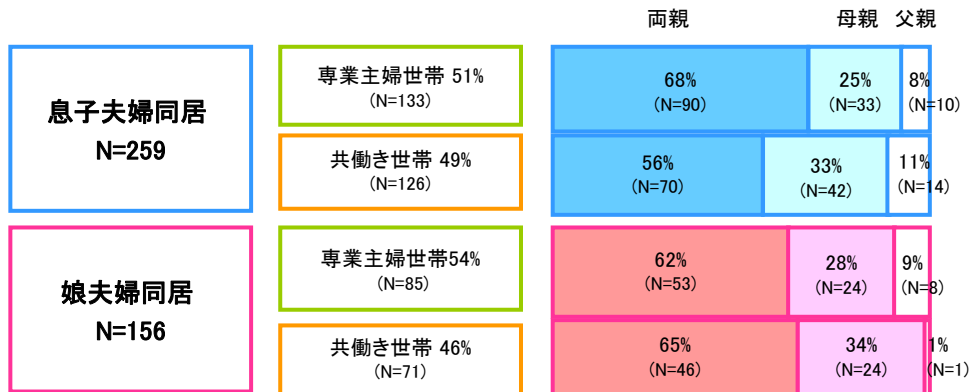
- 1) 親世帯と同居(近居は含まず)
- 2) 中学生以下の子がいる

■回答依頼送付：自社建築注文住宅の居住者のうちホームページアンテナ登録者

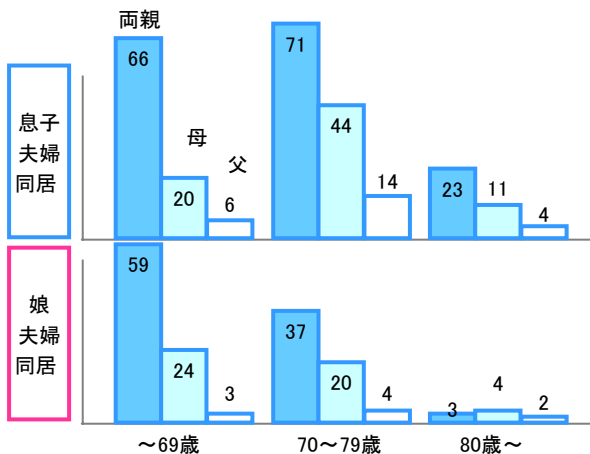
■調査方法：Webアンケート

■調査エリア：自社建築エリア全体  
関東～東海～関西～山陽～北九州の各都府県

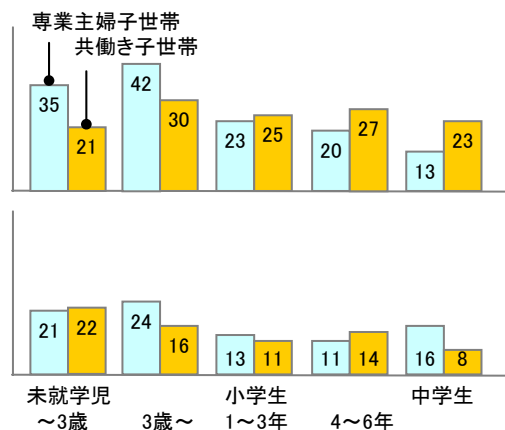
■息子・娘夫婦同居、両親片親、共働き比率



■親世帯の年代分布



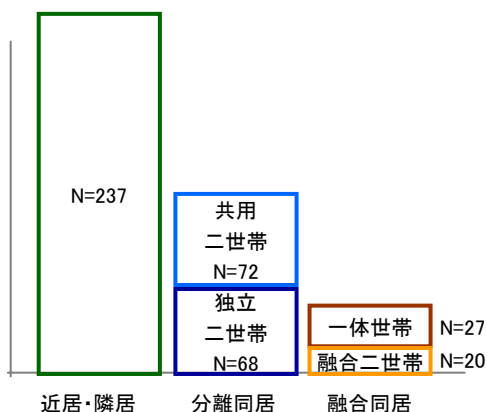
■子世帯の末子学齢分布





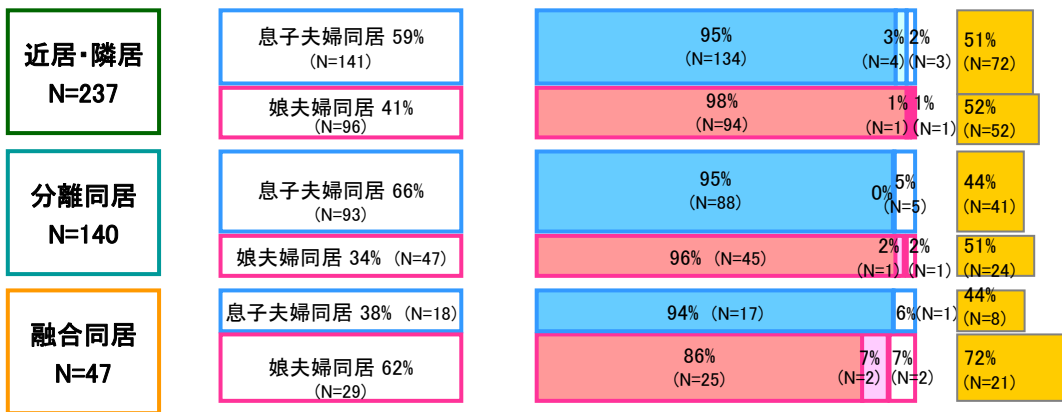
親世帯を対象として、孫との関わりについて調査したものです。親世帯に対するWeb調査のため、男性の回答者が多く、年代も若くなっており、小学生低学年以下の孫が中心となっています。また、融合二世帯、一体世帯が他の調査に比べ少ない傾向があります。

■居住距離・建物分離度別の分布

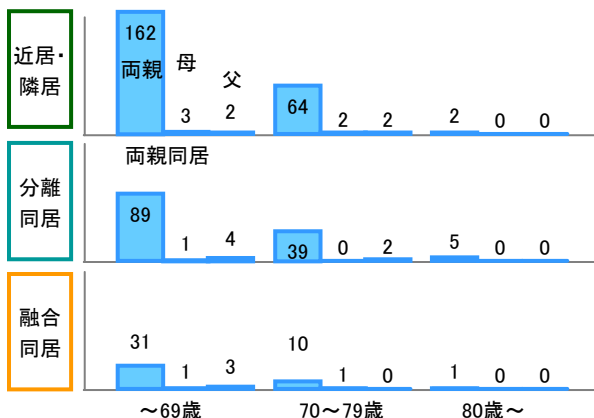


- 調査時期：2010年3月
- 調査対象：親世帯（夫妻のどちらか）で下記条件に適合する方（有効回答数 N=424）
  - 1) 子世帯と近居または同居
  - 2) 子世帯に中学生以下の孫がいる
- 回答依頼送付：自社建築注文住宅の居住者のうちホームページ登録者で登録年齢が55歳以上の方
- 調査方法：Webアンケート
- 調査エリア：自社建築エリア全体  
関東～東海～関西～山陽～北九州の各都府県

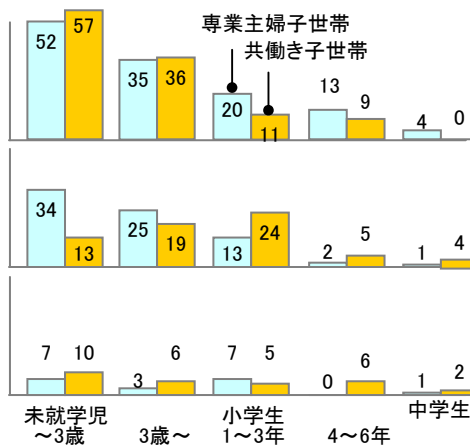
■息子・娘夫婦同居、両親片親、共働き比率



■親世帯の構成と年代分布

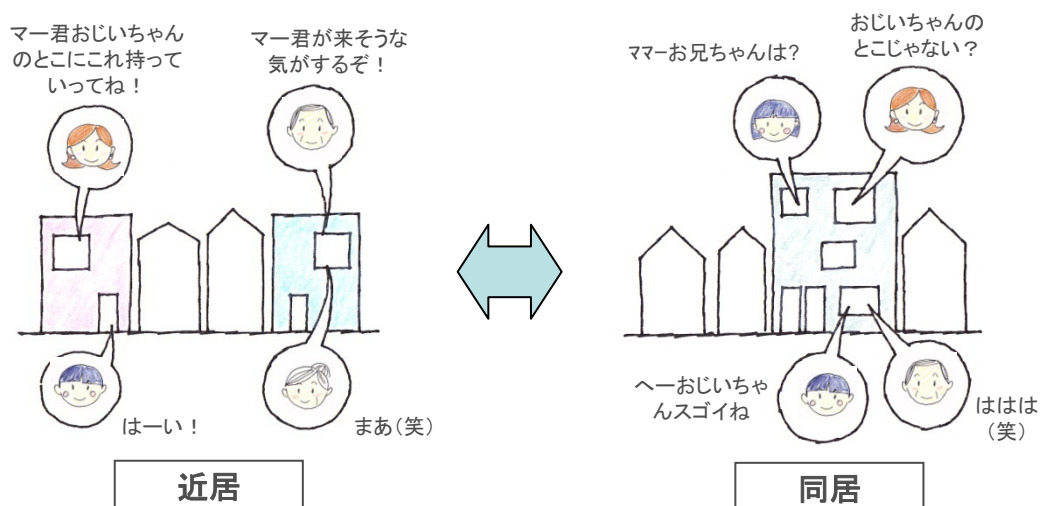


■子世帯の末子学齢分布



## 第一章

### 近居と同居の違い



近居と同居の最も基本的な差は交流頻度にあり、近居では週1回、同居では毎日が標準的です。

同居における毎日の交流は、育児協力において分離した同居生活であっても子世帯主体のスタンスを維持しつつ、留守番や送り迎えといった協力関係につながっています。さらに、生活が融合した同居では、孫を日常的に世話し、しつけも主体的に担う実態が明らかになりました。

近居と同居を比較すると、孫はより礼儀正しく高齢者にやさしくなると評価されています。また、同居では日常的な孫との関わりが楽しく、孫と暮らすことでよく話し、よく笑うようになるとの声を近居より多く得ています。

## 1-1. 協力内容の違い

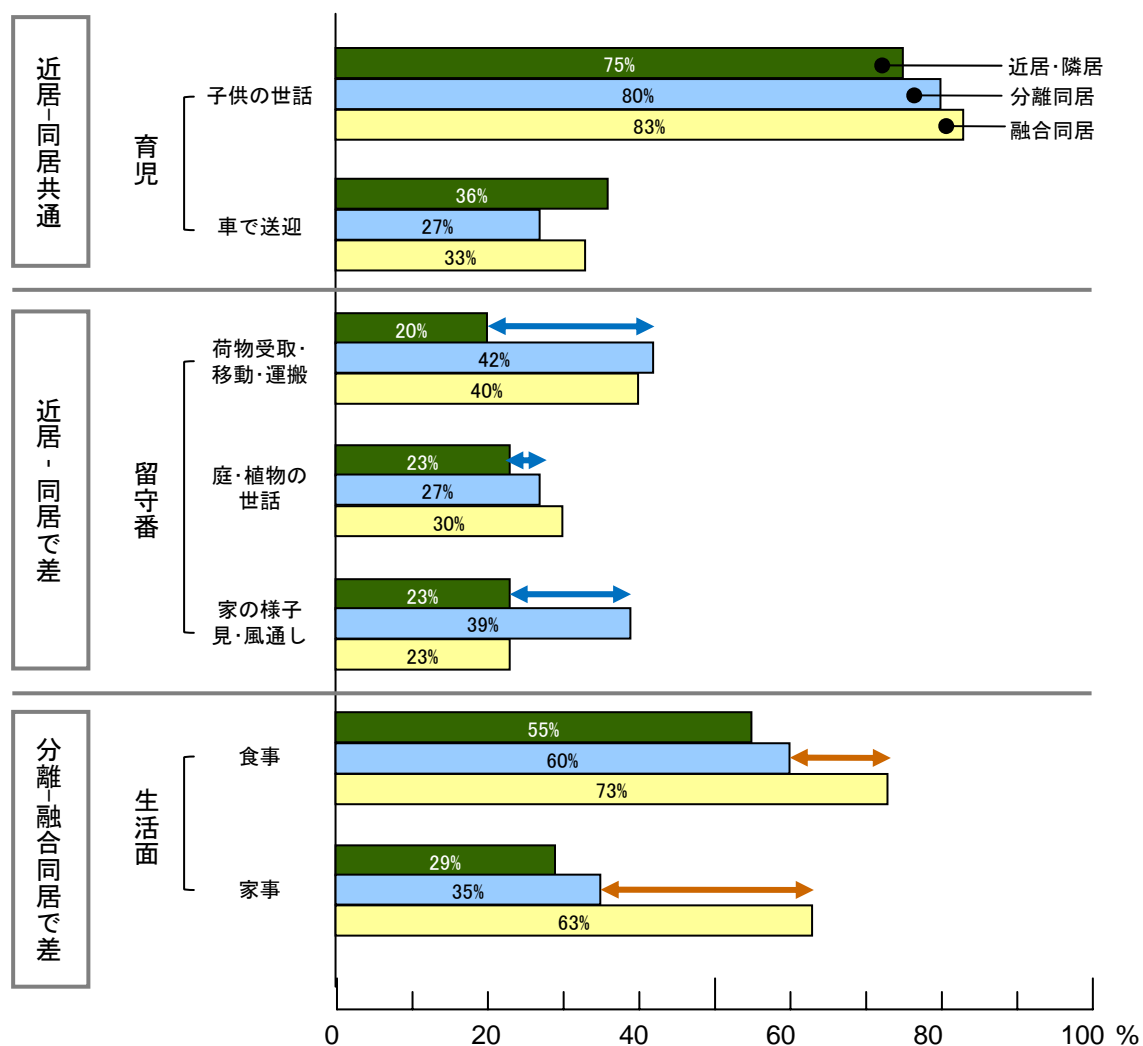
### 育児協力は共通、留守時と生活面の協力は差

親にしてもらったこと（経験）がある項目では、「子供（孫）の世話」が近居同居を問わず上位を占めています。「車で送迎」も、育児関連が多いと考えられます。

近居-分離同居間で差がつく、すなわち同居特有の項目としては、荷物受取り、庭や植物の世話、風通しといった子世帯が留守のときに関係した項目です。

分離同居-融合同居間で差がつく、すなわち生活を融合させることで生まれる項目としては、食事、家事といった生活面の協力が挙げられます。

#### ■親にしてもらったことがある協力（調査A）



## 1-2. 交流頻度の違い

### 近居は週1回、同居は毎日

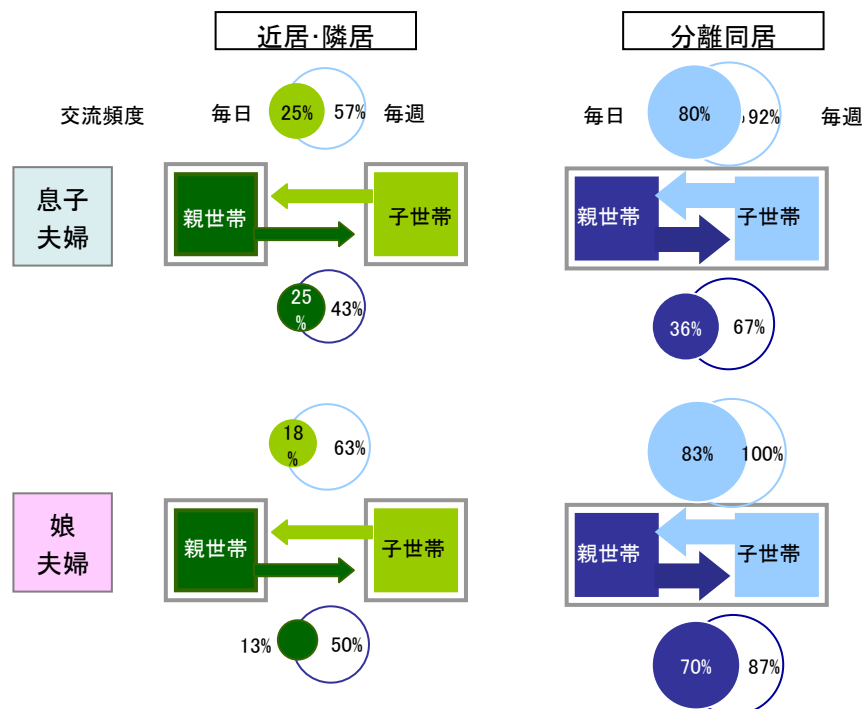
親世帯と子世帯の区分が明確な分離同居を対象として、親世帯-子世帯間の行き来の頻度を近居と比較してみました。

近居・隣居では週1回以上の交流が約4-6割、1日1回以上の交流は2割程度です。これに対し分離同居では子世帯→親世帯の交流では1日1回以上が約8割であり、毎日のように交流していることがわかります。

分離同居では、子世帯→親世帯の行き来、つまり子世帯が親世帯へということが多く、逆に親世帯が子世帯へ行く頻度は相対的に低くなっています。特に息子夫婦同居ではこの傾向が顕著に表れ、嫁である子世帯妻への配慮が表れた結果と推測されます。娘夫婦同居では、この傾向が薄まり、毎日の交流頻度も息子夫婦同居に比べて高くなっています。

近居と同居とで、協力項目としては同程度の比率になるものであっても、協力の頻度は同居の方が高く、日常的なのではないかと思われます。

#### ■親子世帯間の交流頻度



### 1-3. 交流目的の違い

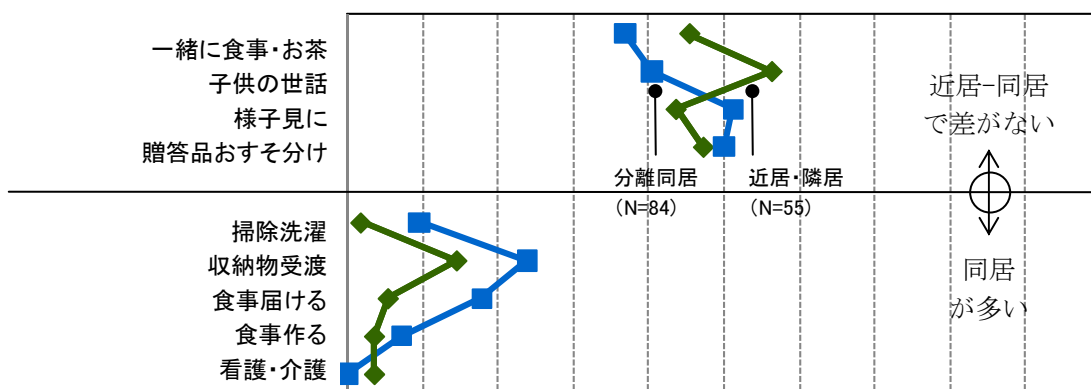
## 近居は育児協力、同居は食事や家事協力で行き来

前項と同様に分離同居を近居とでの、交流の目的を比較してみました。

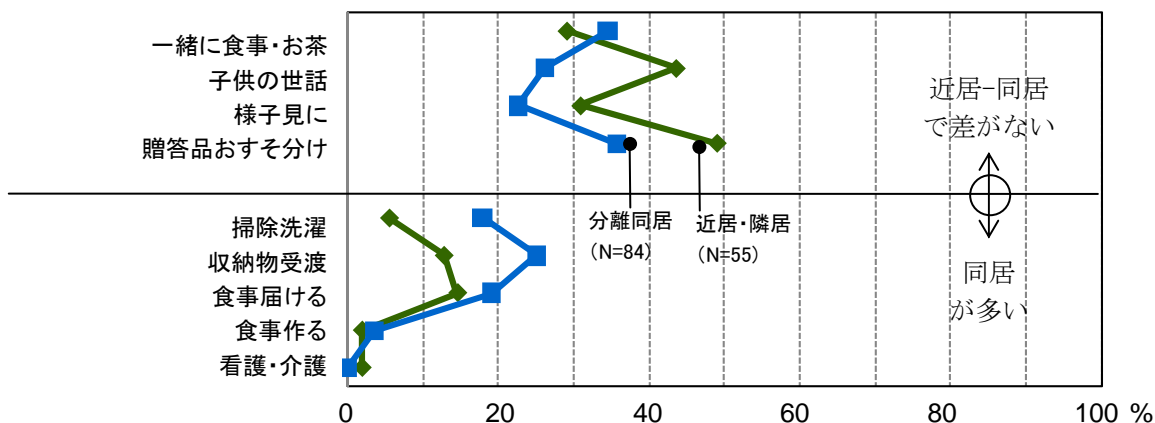
子世帯が親世帯に行く目的、親世帯が子世帯に来る目的共に、「子供の世話」では近居・隣居が同居を上回り、近居では育児協力のための行き来が頻繁であることがわかります。同居の子育てサポートは、両世帯に分かれていても同じ家に居ることである部分達成されているのではないかと思います。

家事関連の項目では同居の方が全般に上回っており、家事協力は同居で進みやすいことが分かります。看護介護での差はあまりありませんが、これは現在介護を必要とするケースがまだ少ないため、家事協力のしやすさは介護時にも有利と考えてよいでしょう。

#### ■親世帯に行く目的(調査A)



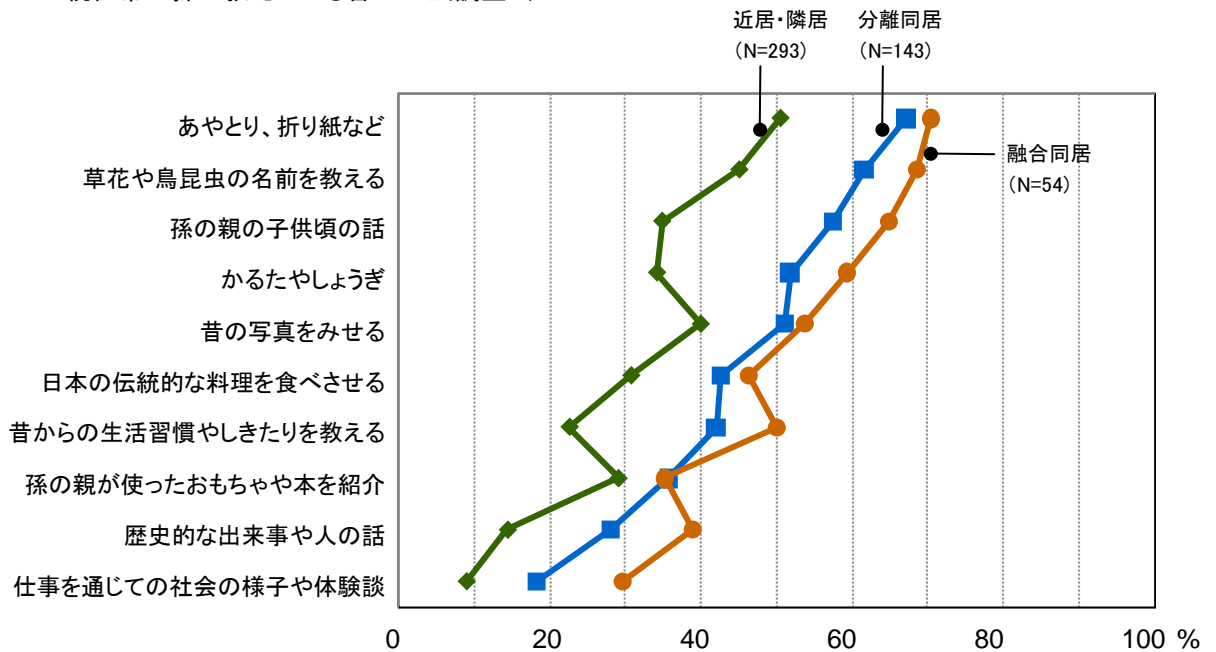
#### ■親世帯が来る目的(調査A)



親世帯は、孫との交流で色々なことを伝えています。親世帯が教えている昔のことを多い順に並べてみると、あやとり、折り紙などの遊びや草花昆虫の名前、昔の出来事や写真を見せるなど父母との交流ならではの項目が上位を占めています。

各項目で分離同居、融合同居ともに隣居・近居より比率が高く、日常的な交流の中で、昔の出来事や伝統文化が伝わっていく様子が目に浮かびます。

■親世帯が孫に教えている昔のこと(調査C)



## 1-4. 育児協力の質の違い

### 近居は孫の世話を時々、同居は日常的

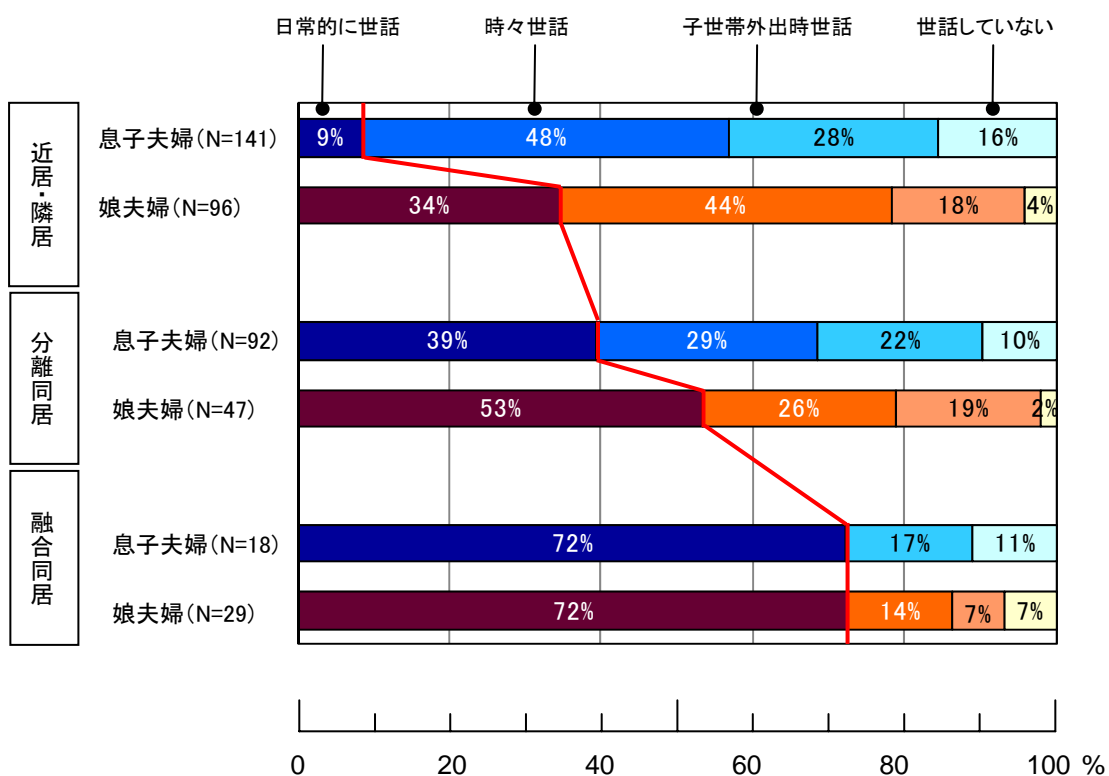
育児協力をしてもらった経験や、交流目的で子供の世話が挙がる比率では近居の方が同居より高かったのですが、その頻度や内容の濃さについては同居が上回るようです。

孫の世話をする頻度では、近居・隣居より分離同居の方がより「日常的に世話」していることが多く、融合同居では7割に達します。娘夫婦同居は息子夫婦同居より多い傾向が見られ、近居・隣居では特にその傾向が顕著です。

現在している世話については、子世帯の留守時や送り迎えといった項目は同居共通で近居・隣居より高く、同じ家に住んでいる同居が有利な内容といえます。日常生活や病気のサポートでは融合同居のみが高く、より日常的な世話となっていると考えられます。また、対外的な窓口としてのPTAや学校関係の付き合いでは、少ないながらも融合同居に限り関与が見られ、親代わりとしての役割を果たしています。

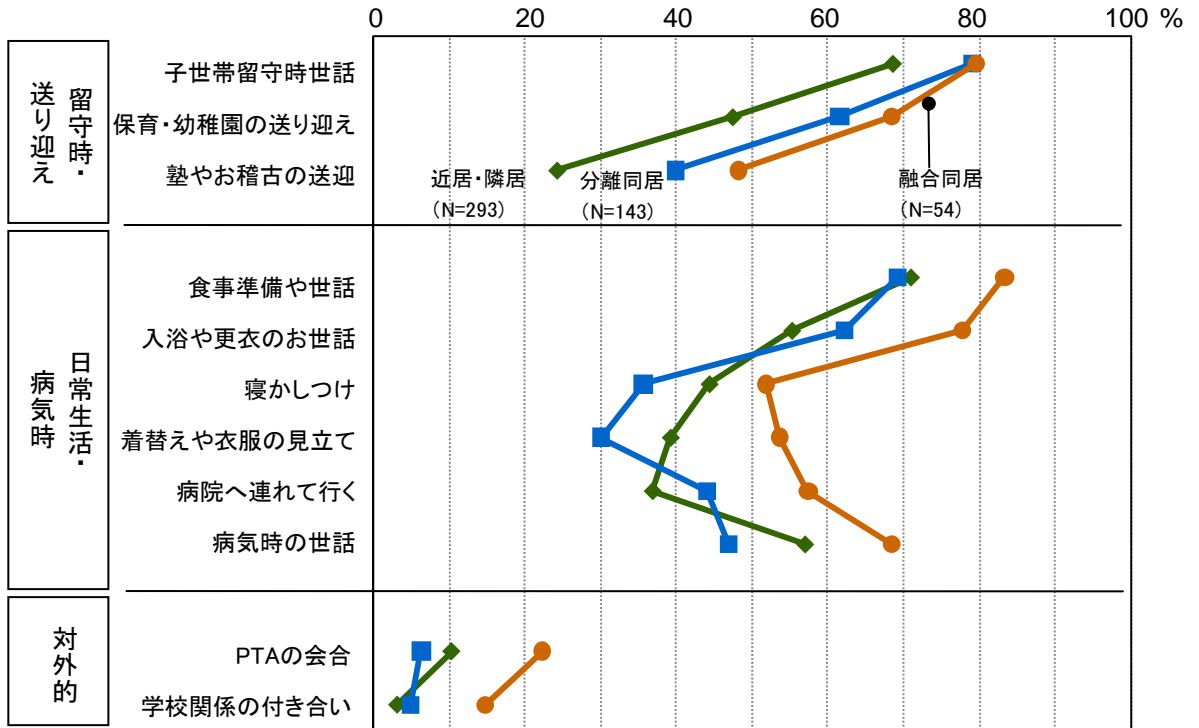
最も楽しい孫との関わりを自由に書いてもらった内容を分析すると、同居では日常的なことを挙げるのが多いのに比べ、近居・隣居ではイベント的な性格をもつものが多く挙げられます。

■孫の世話をする頻度(調査C)

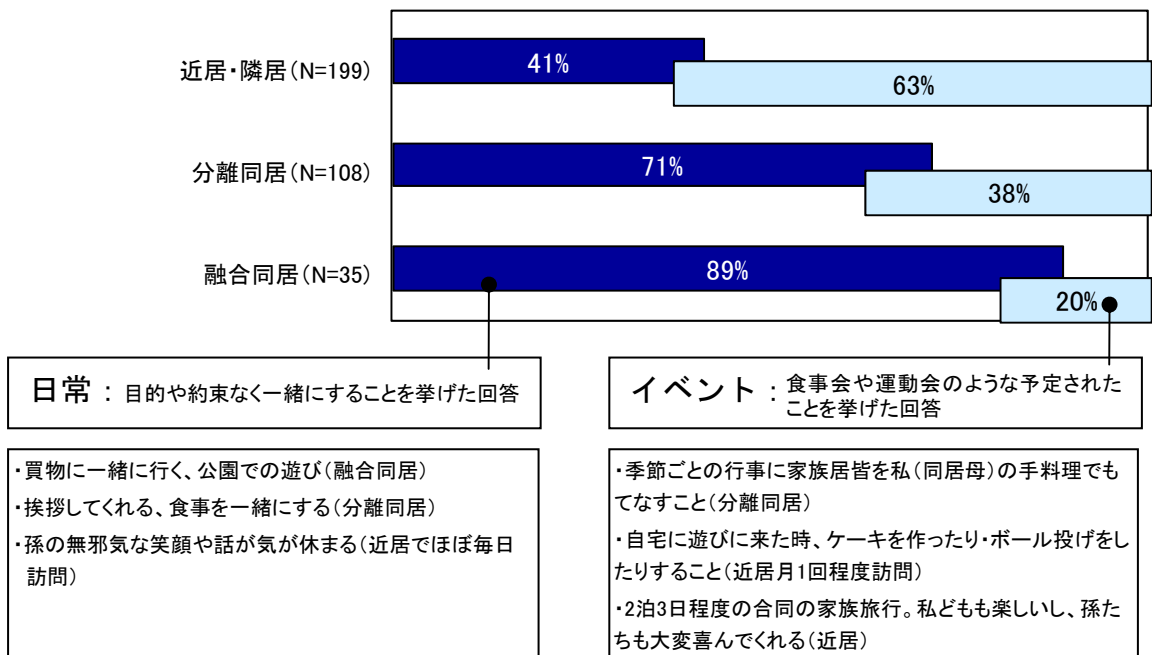




■現在している孫の世話(調査C)



■最も楽しい孫との関わり(調査C:自由回答の算出による)



※近居の場合、判断しづらい簡単な記述(例：一緒に遊ぶこと)に関しては、「近居孫の訪問頻度」が週1回以上の場合は「日常」とし、それ以下の場合は、「イベント」とした。

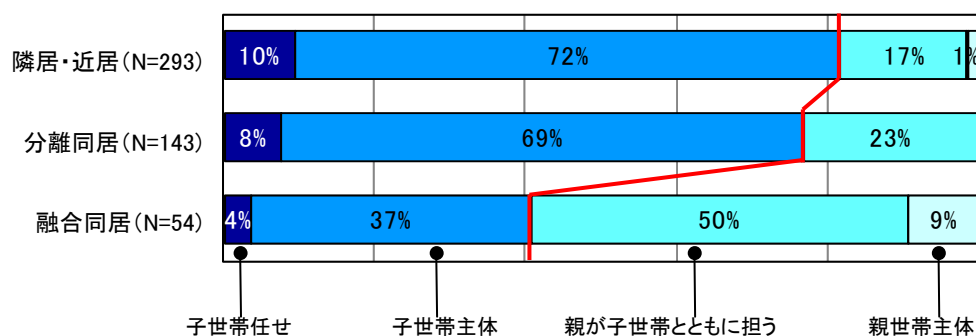
## 1-5. 孫共育の成果

孫は礼儀正しく、高齢者にやさしい子になり、  
親世帯も明るく

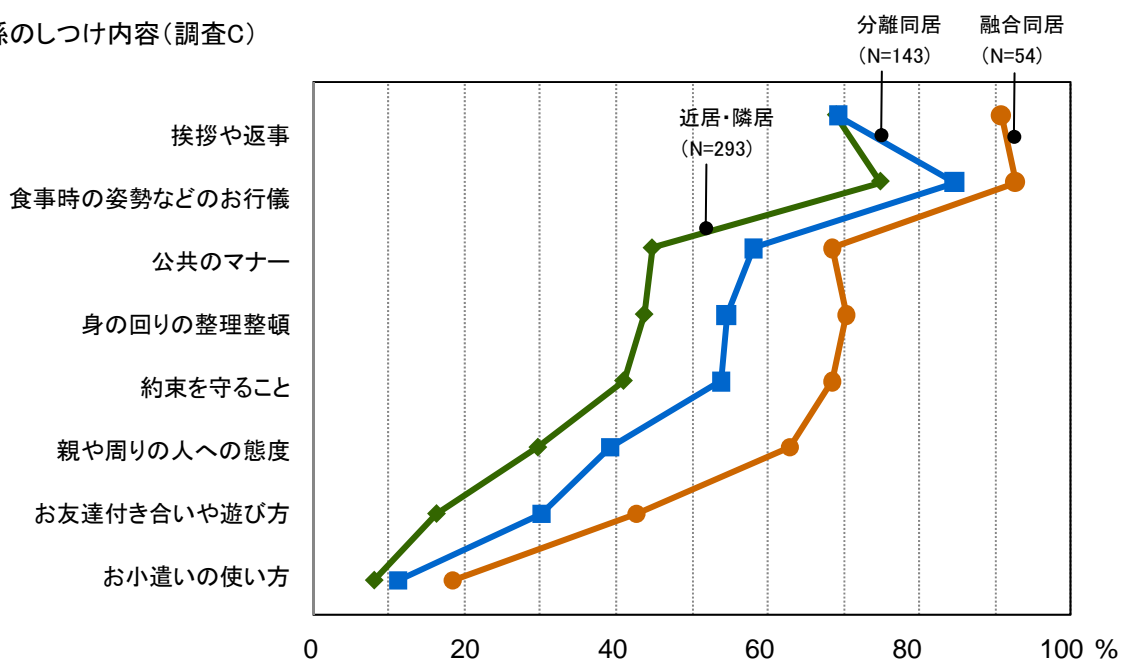
孫のしつけを「子世帯と共に」または「親世帯が主体で」担うという意識は、親世帯回答では、近居・隣居、分離同居では約2割、融合同居では約6割に達しています。分離同居では子世帯主体のスタンスが8割に近く、日常的な世話をある程度していても融合同居との差が明確に表れました。

しつけの内容では、挨拶やマナー、態度に関するものが上位を占め、近居・隣居-分離同居-融合同居の順に多く挙げられる傾向があります。

### ■孫のしつけに対するスタンス(調査C)



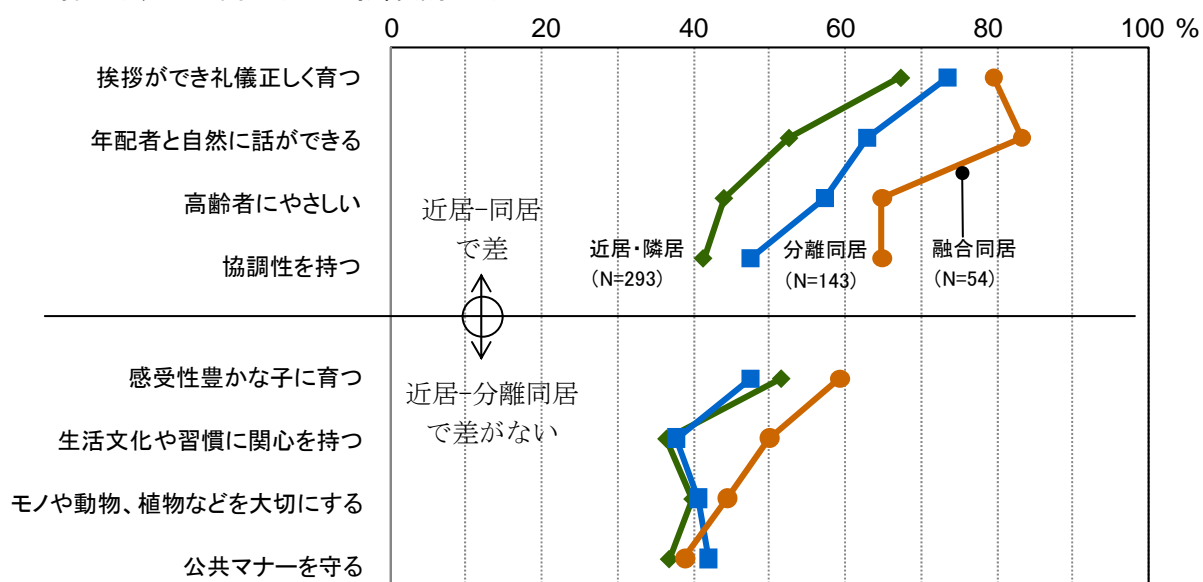
### ■孫のしつけ内容(調査C)



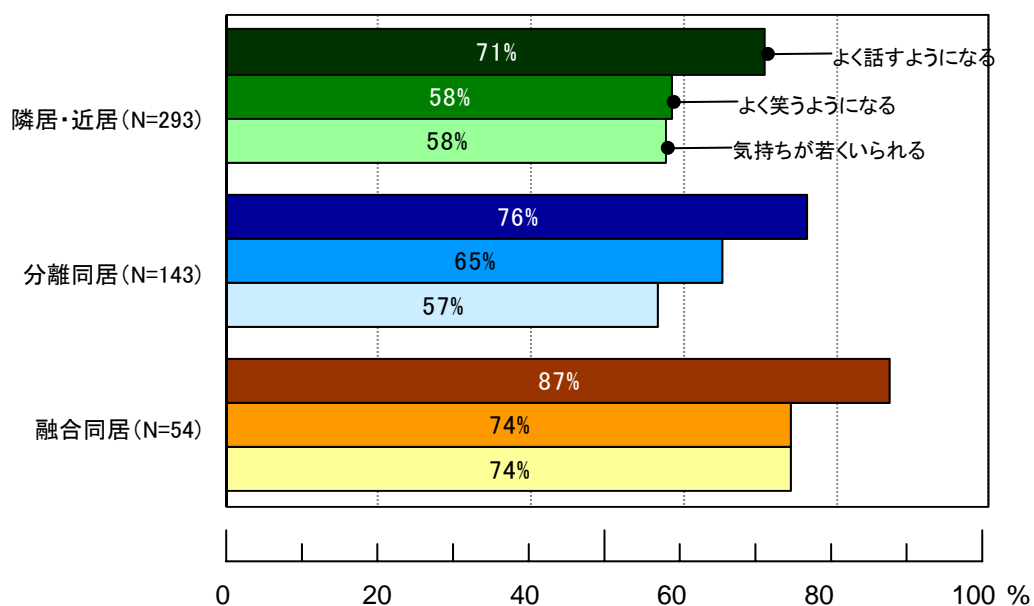
孫の成長や人間形成への影響では、礼儀正しく、高齢者との会話ややさしさ、協調性といった項目で近居・隣居-分離同居-融合同居の順で評価が高くなっています。

親世帯側の孫による生活の変化では、よく話す、よく笑うといった項目で同様に、近居・隣居-分離同居-融合同居の順で評価が高く、孫との関わりが親世帯の明るさや張り合いにつながる傾向が見て取れます。

■孫の成長や人間形成への影響(調査C)



■孫による生活の変化(調査C)



## 1-6. 親世帯が立ち入らない場所

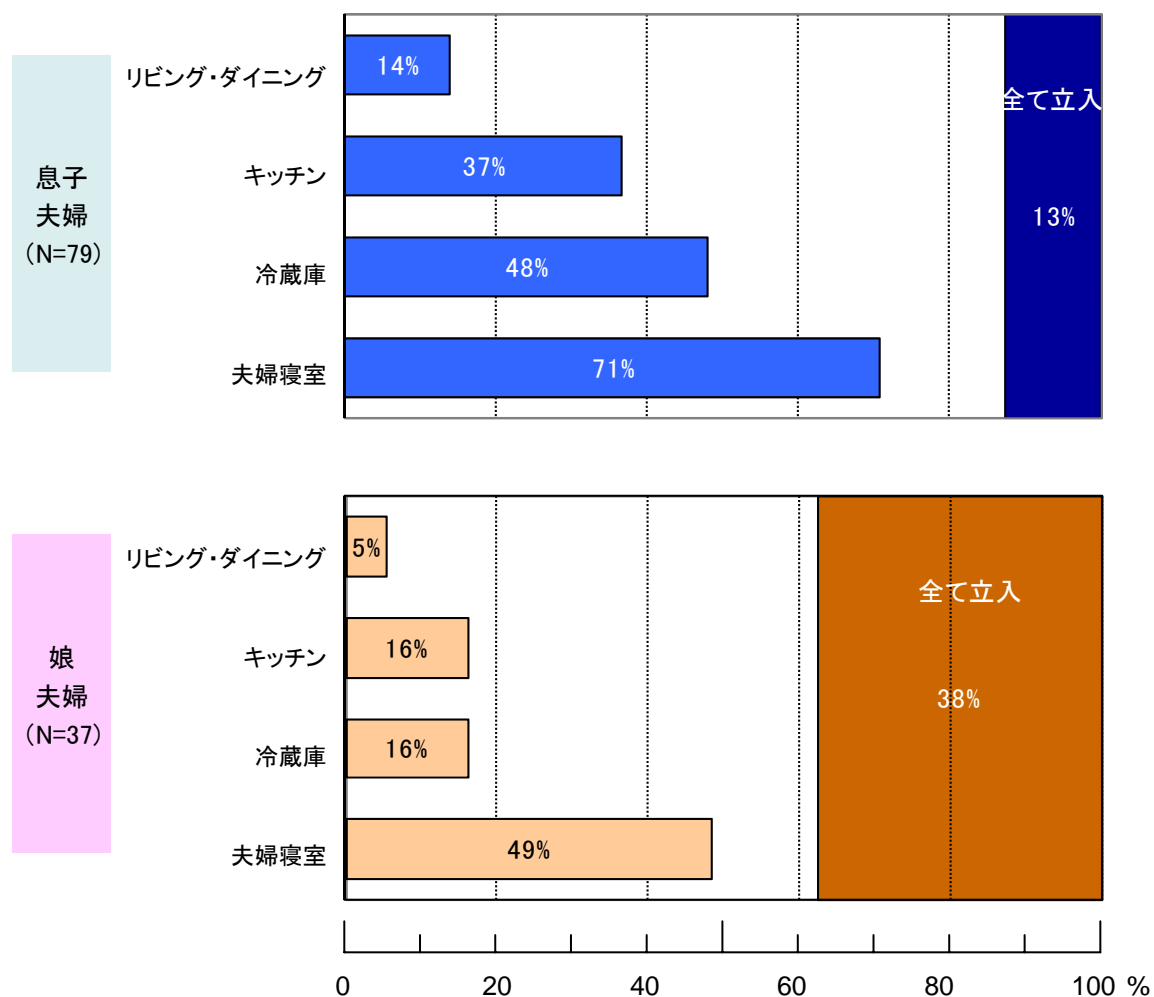
### 夫婦寝室が共通、息子夫婦同居ではキッチン回り

孫共育で子世帯に来る機会の多い親世帯ですが、子世帯の中で立ち入らない部屋や使わないものはあるのでしょうか。

息子夫婦同居、娘夫婦同居ともに夫婦寝室には入らない、とした回答がおよそ5割以上を占めトップになりました。夫婦寝室は不在時でもプライバシーが守られるべき空間として認識されているようです。キッチンや冷蔵庫は、息子夫婦同居では立ち入りを避けているのに対し、娘夫婦同居では気にしている様子はなく、差ははっきりと出ました。

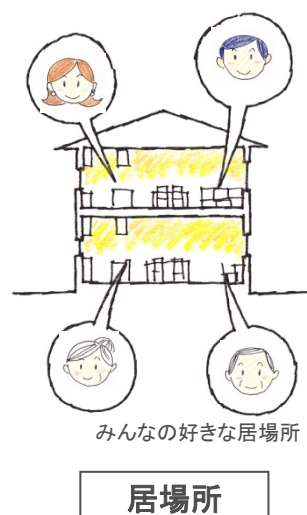
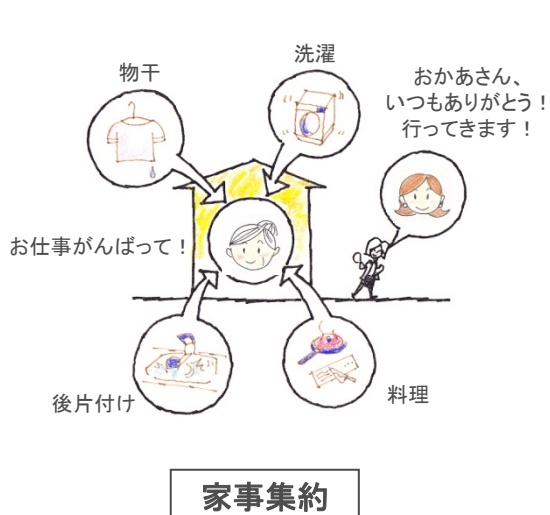
孫共育をしながらも、子世帯の守るべきプライバシーを意識したくらし方をしているといえるでしょう。

■親世帯が来訪時に立ち入らない場所、使わないもの(調査A)



## 第二章

### 同居における家事集約・協力と居場所



息子夫婦同居・娘夫婦同居、あるいは両親・片親同居、子世帯が専業主婦・共働きといった家族の構成や状況によって、同居生活の分離・融合志向が影響されます。

共働き子世帯は夕食が遅く、親世帯と孫で先に食事するパターンも多いといえます。また共働き娘夫婦同居を中心に、家事を母親に集約して子世帯妻が仕事に専念する「家事集約」という生活スタイルがあることが、とても興味深いです。

生活の共同化が進むほど、個人の居場所を確保する重要性が増します。特に息子夫婦同居の妻や娘夫婦同居の母は、一人になれる場所としての居場所が必要だといえます。

## 2-1. 家族構成で異なる同居生活志向

# 娘夫婦同居・片親・共働きは融合志向の要素

二世帯の分離・融合志向は、家族の構成や状況により異なります。

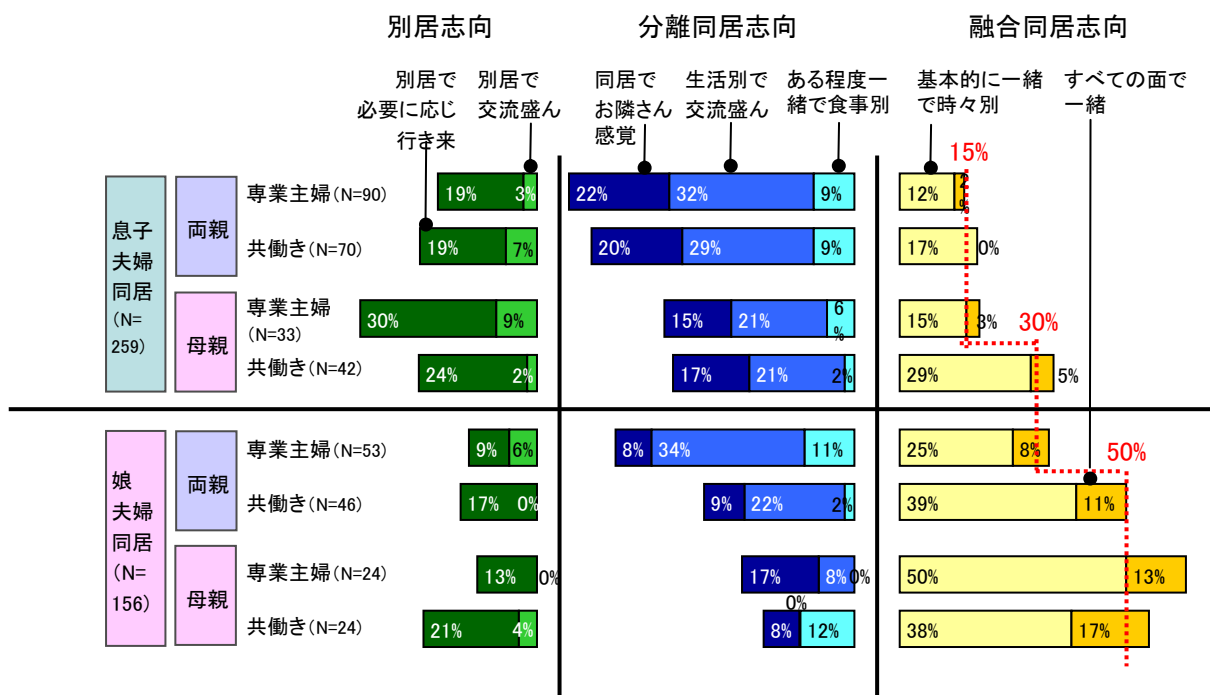
息子夫婦同居は娘夫婦同居に比べて全体的に別居志向・分離同居志向が高い傾向にあります。

息子夫婦×母親同居と娘夫婦×両親同居の場合は、子世帯妻の就業の有無による影響を大きく受けます。共働きの場合には、親世帯のサポートを期待して、融合同居志向が高まっているといえるでしょう。

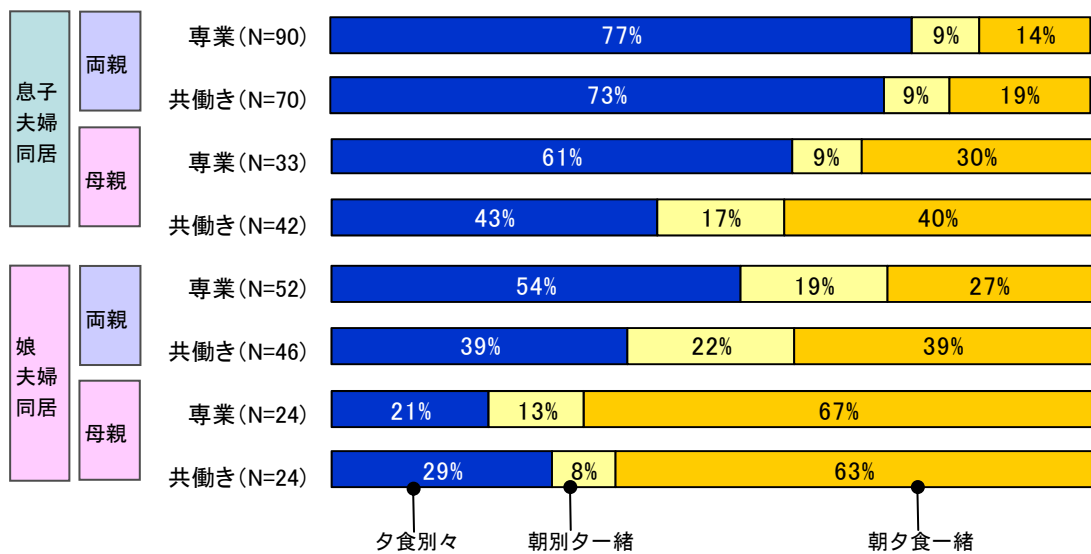
夕食・朝食を両世帯が別々に取っているか、一緒に取っているかは、二世帯の分離・融合志向が反映されています。分離志向の強い息子夫婦同居では別々に取っていることが多く、娘夫婦×母親同居の場合では一緒に取る割合が2/3程度になっています。

夕食を別々に取る場合、親世帯は19時前の早い時間に、子世帯は19時以降の遅い時間にとることが多いと言えます。一緒に取る場合には、親世帯が遅めの夕食にして時間を合わせている様子が伺えます。

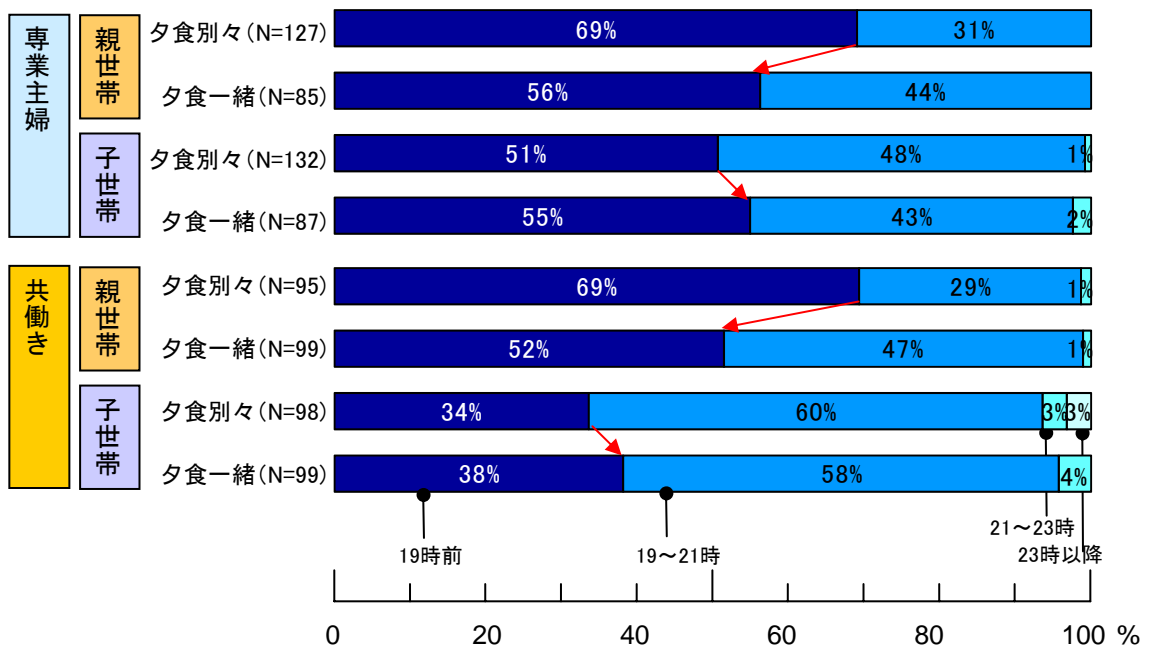
### ■両世帯の同居・近居生活のあり方(調査B)



■夕食・朝食が親世帯と別々か/一緒か(調査B)



■夕食をとる時間帯(調査B)



## 2-2 夕食準備の協力・集約

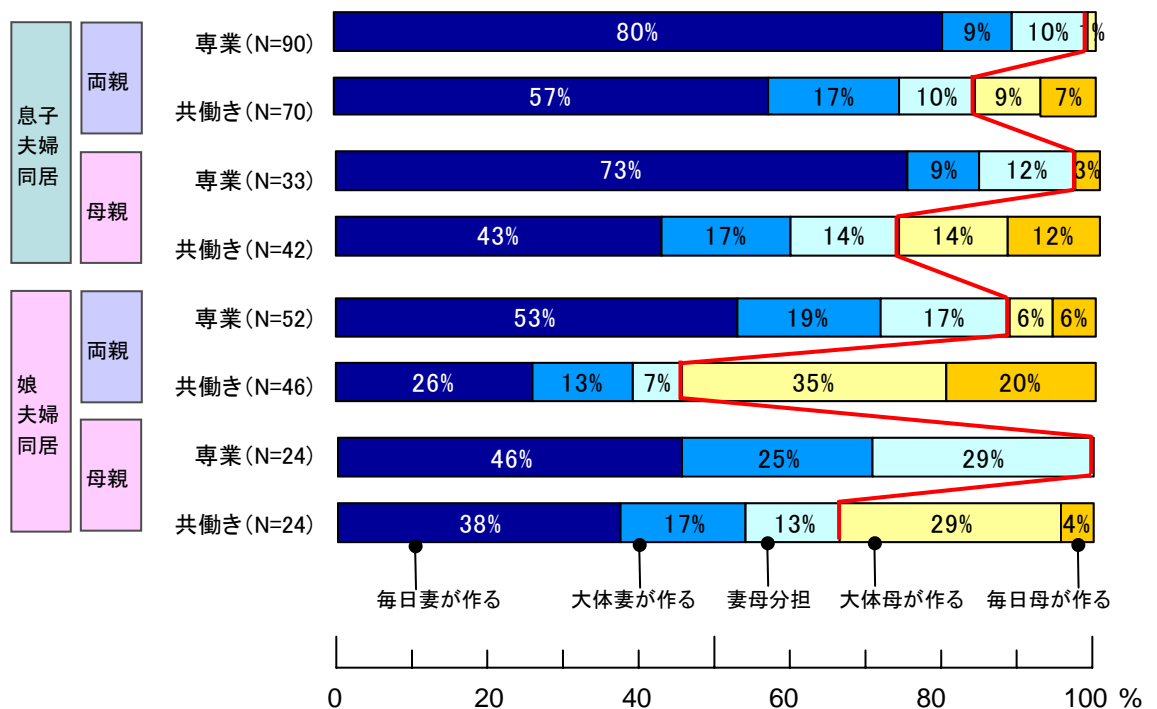
共働きの娘夫婦×両親同居では母親集約型が多い

子世帯の夕食の準備を担当する人は家族の構成や状況によって異なります。

子世帯が専業主婦の息子夫婦×両親同居の場合、9割は妻が主体となって夕食の準備を行います。息子夫婦同居より娘夫婦同居、専業主婦より共働きになると、母の関与が高まる傾向にあります。

特に、共働き娘夫婦×両親同居の場合は、「毎日母が作る+大体母が作る」割合が5割を超えており、親世帯への家事集約が顕著に表れています。

### ■子世帯夕食準備の分担(調査B)



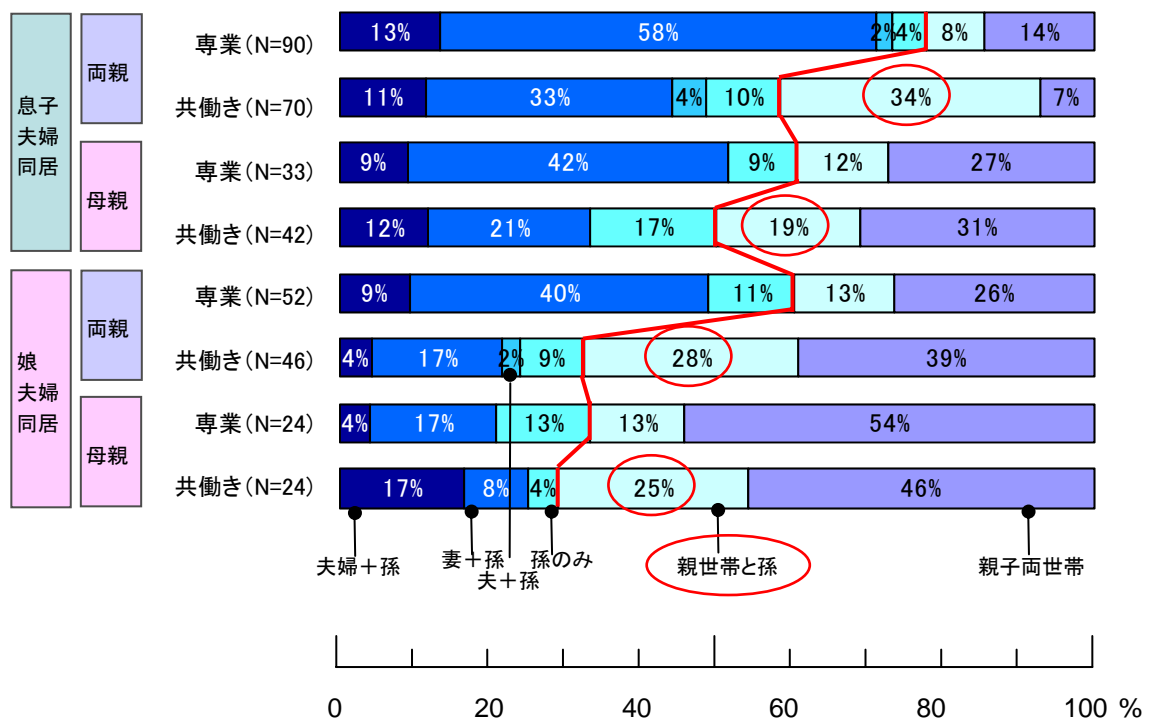


家族が誰と夕食を食べているかも、家族の構成や状況によって異なります。

全体の傾向として、息子夫婦同居より娘夫婦同居のほうが、子世帯が親世帯と一緒に夕食を取る割合が高くなります。また子世帯が専業主婦より共働きの方が、親世帯と孫で食事をする割合が高いことがわかります。

特に、子世帯が専業主婦の息子夫婦×両親同居では「妻+孫」の組み合わせが5割を超えて最も多いのに対し、共働きの息子夫婦×両親同居ではそれが半減し、親世帯と孫で食事をする割合が一番高くなるという違いが見てとれます。

■孫が夕食をとる家族の組合せ(調査B)



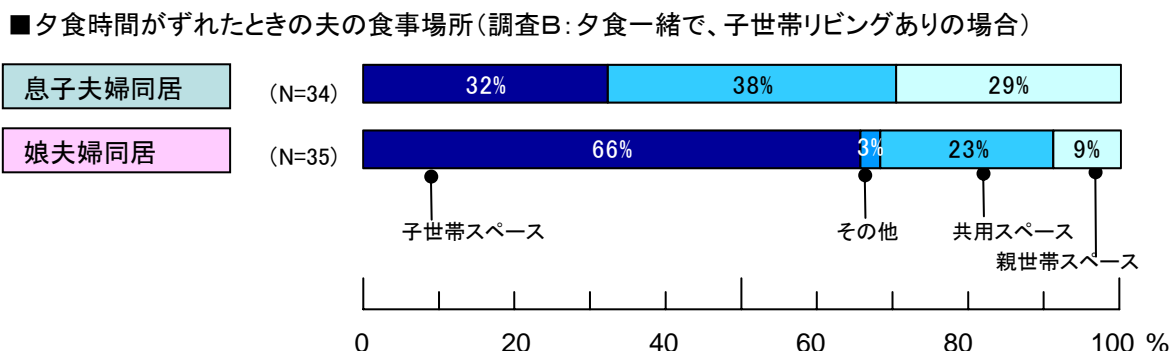
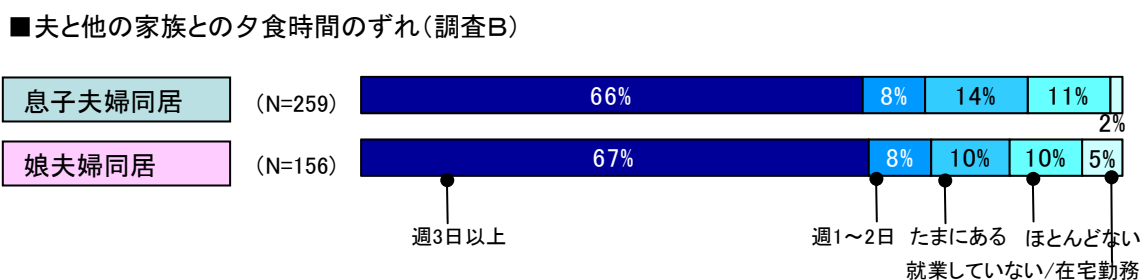
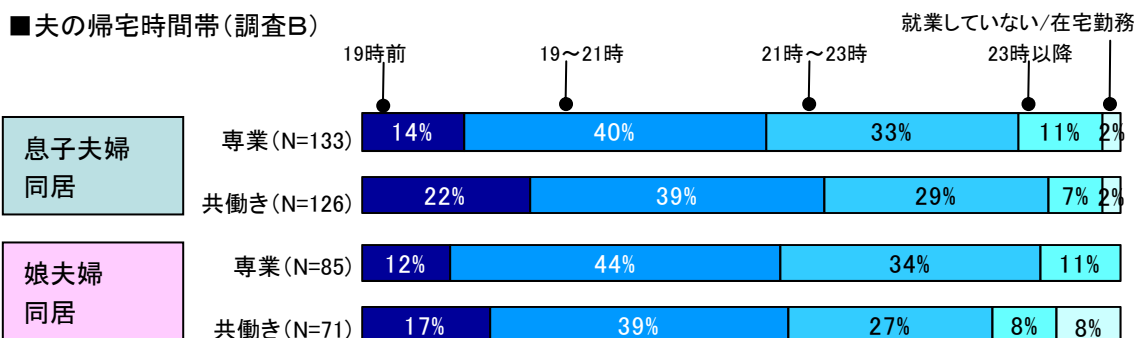
### 2-3. 夫の夕食時間がずれる場合

## 娘夫婦同居の場合は子世帯スペースで

夫の帰宅時間は、共働きで若干早い傾向にありますが、全体として4割程度が21時以降の帰宅となっています。

そのため夫の夕食は他の家族とずれてとることが多くなります。この傾向は、息子夫婦同居、娘夫婦同居ともさほどの違いはありません。

しかし、夕食時間がずれた夫が夕食を取る場所に関しては、大きな違いがあることがわかります。娘夫婦同居の夫は、子世帯専用スペースで夕食を取る割合が約7割になっており、夫の気兼ねが伺えます。子世帯スペースに補助的な食事空間を考慮する必要があるといえます。



## 2-4. 洗濯の協力・集約

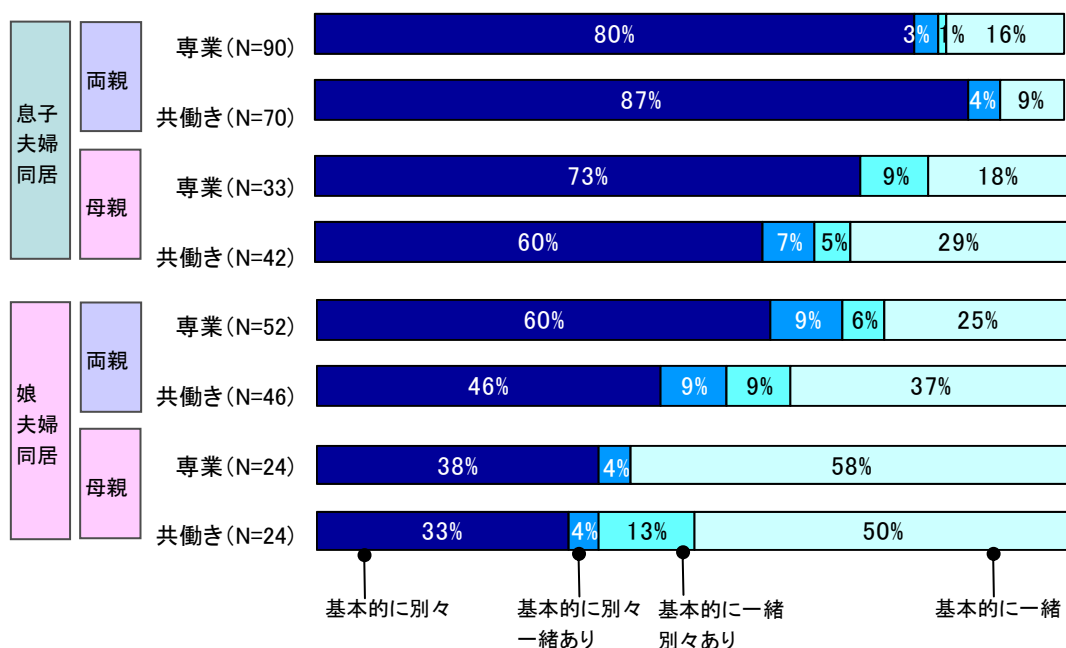
### 娘夫婦同居、母親同居は洗濯も集約傾向が強い

洗濯を親世帯・子世帯で一緒にするか・別にするかに於いても、家族構成による違いが見られます。

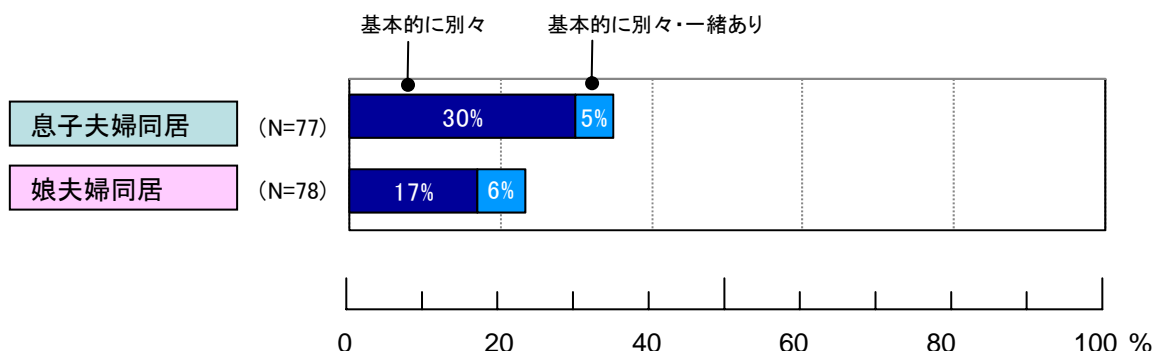
息子夫婦同居より娘夫婦同居が洗濯を一緒にする割合が高く、娘夫婦×母親同居の場合は、就業の有無に関わらず5割以上が一緒にしていることがわかります。

逆に、一台の洗濯機を両世帯で共用している場合でも、洗濯を別々にしている場合があります。娘夫婦同居よりも息子夫婦同居に多く35%に達しています。洗濯機置き場が2台分必要か建築段階で要望を確認する必要があると言えます。

#### ■洗濯が親世帯と別々か/一緒か(調査B)



#### ■親世帯と子世帯で洗濯機が1台のみの場合の洗濯(調査B)



## 2-5. 個人の居場所

### 融合した生活ほど居場所が重要

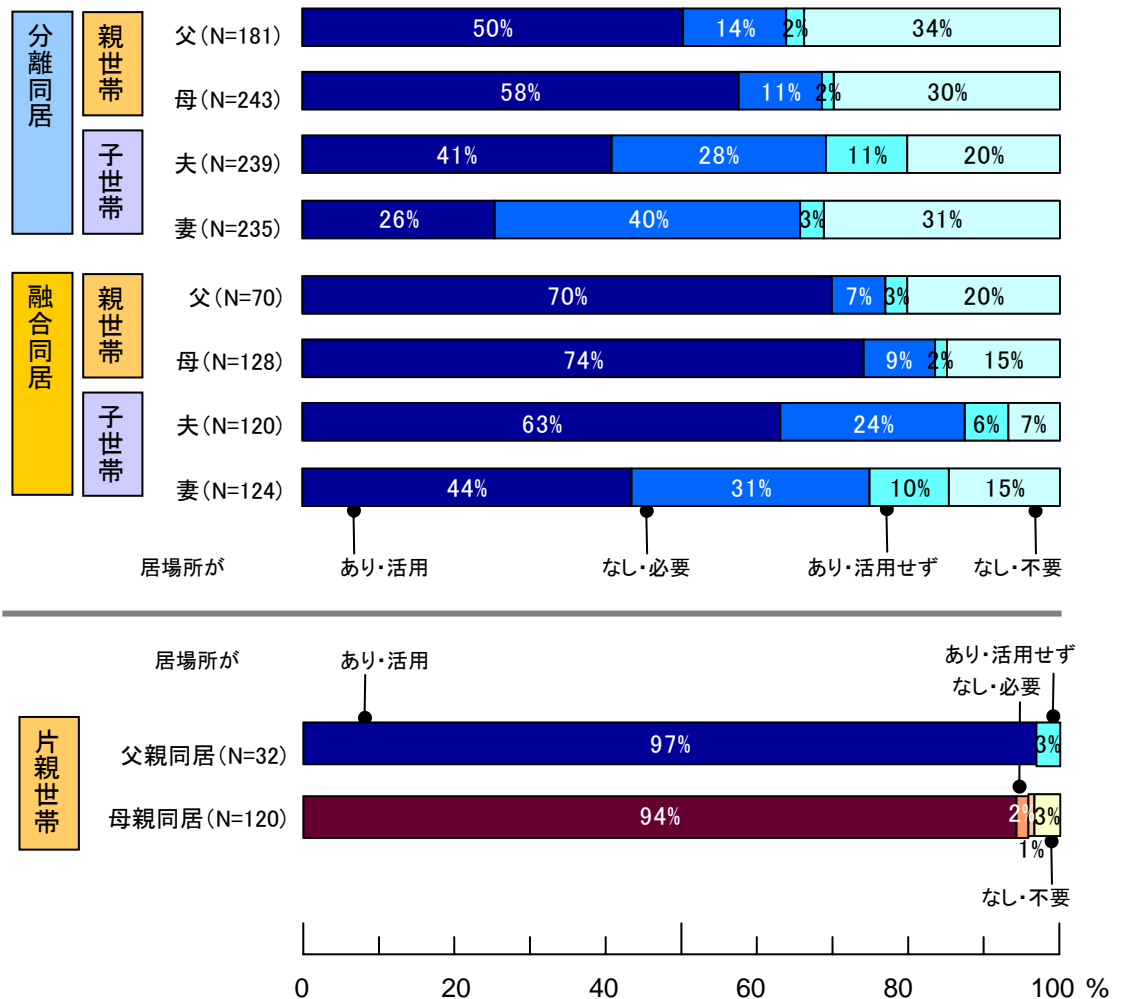
親世帯父と母、子世帯夫と妻の専用の居場所\*があるか、活用しているかの実態を調べました。

全体として、居場所に対するニーズ（「現在居場所があり活用している人」＋「居場所はないが必要と感じている人」）は6割を超えており高くなっていますが、特に融合同居では全ての家族について8割前後となっています。生活の一部が融合しているほど、個人の居場所の重要性が増すようです。

また、片親同居の場合に父と母が居場所を持つ割合の高さは、自分の部屋＝自分の居場所と認識していると考えられます。

\*ここでの居場所とは、自分一人でTVを見たり等好きなことをして、気ままに過ごせる場所をいう。

■居場所の現状と希望（調査B） 家族の居場所について子世帯妻が回答



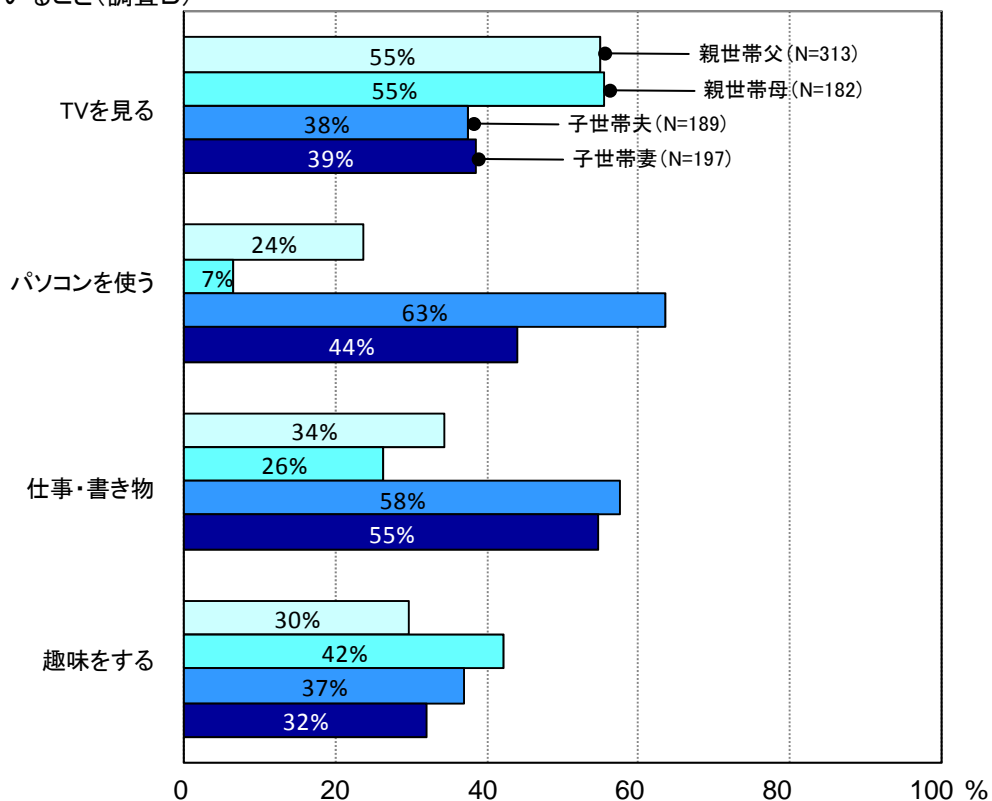
必要だと思われている居場所、そこでどんなことがされていて、その為にはどんな空間が望ましいのでしょうか。

親世帯・父と母共通で「TVを見る」の割合が高く、居場所にTVを置くか、共用TVが見えることが条件だといえます。母の場合は、趣味をすることも高く、その作業に応じたスペースや収納の設計が必要になります。

子世帯の夫と妻は、共通して「仕事・書き物・PCを使う」という「デスク作業」が中心であることがわかります。作業カウンターと共に必要な機器・備品の置き場所や収納を配慮した計画が望まれます。

また、居場所で「一人になれる」ことを重視しているのは 融合同居の息子夫婦×両親同居の妻と、融合同居の娘夫婦×母親同居の母であることもわかりました。

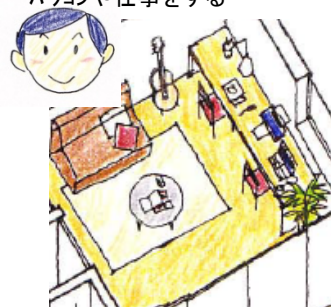
■居場所で行っていること(調査B)



母の居場所  
例えば・・・  
親世帯床上げ和室で趣味の手芸を  
ダイニングでは、好きなTVを観る



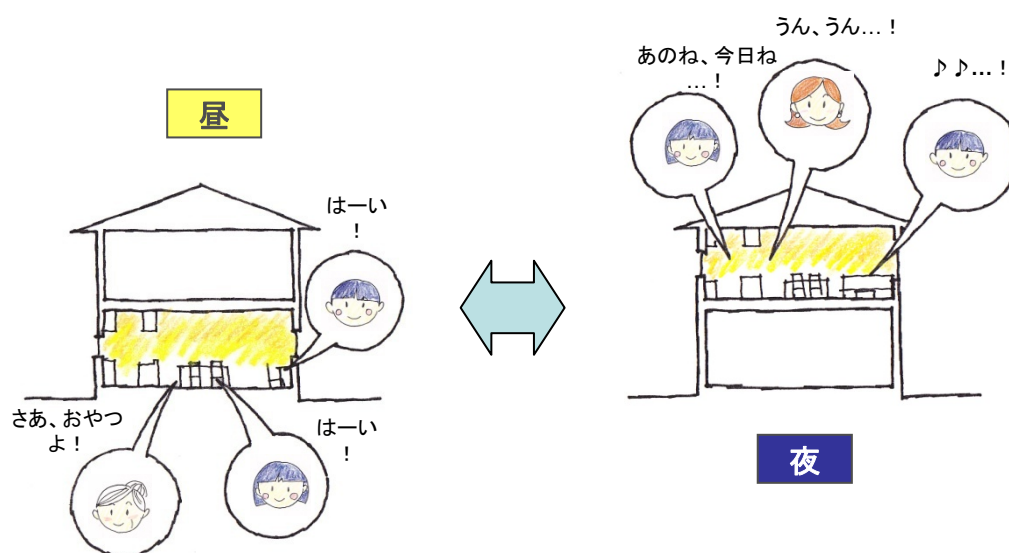
夫の居場所  
例えば・・・  
(将来の)主寝室にデスクコーナー  
パソコンや仕事をする





## 第三章

### 孫共育のススメ



第一章では「孫共育」、第二章では「家事集約」といった新しい二世帯による協力関係について述べました。そして協力関係が進むほど「居場所」の重要性が増すことも示唆されています。このような相反する要求は、どのように二世帯住宅の中に造り込めば良いのでしょうか。

孫共育を形にした二世帯住宅とする手法を、3つの提案を整理しました。従来子世帯の一部であった孫のスペースは、親世帯と子世帯の中間に配置され、親子両世帯が孫に関わりつつ、各世帯のプライバシーや居場所の確保に配慮されています。

また、親世帯共通のテーマである加齢配慮や、子世帯の孫の成長に対応した可変性もコンパクトに実現する手法を提案しています。

### 3-1. 孫共育ゾーニングの提案

## 孫共育ゾーンは親世帯子世帯の間に

今までの孫を含んだ子世帯にはできるだけ干渉しないといった、自立志向の二世帯同居では、住宅のあり方としても世帯ゾーンをどう分離するかがテーマになっていました。

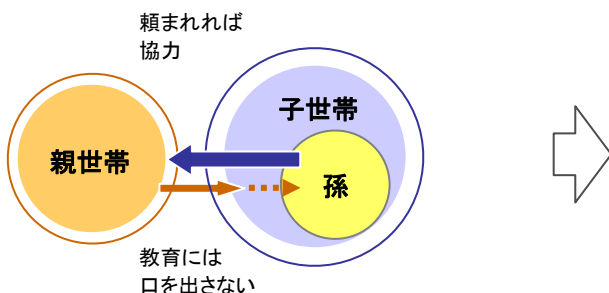
しかし、孫共育では、親世帯と孫との関係が強まり、子世帯が不在の時はあたかも親世帯と孫が一つの世帯のようなくらし方となっています。共働き妻の帰宅を境に、昼と夜で世帯の形が切り替わるような生活が典型的で、娘夫婦同居では夕食準備を親世帯に集約し、夕食後に各世帯に分かれるようなくらしも始まっています。

孫共育の考え方を模式化すると、下の図のように表現できます。このようなくらし方に対応して、二世帯住宅のゾーニングでも孫共育ゾーンを親世帯と子世帯の間に位置させ、両世帯からアクセスしやすくするとともに、各世帯専用ゾーンのプライバシーや居場所の確保に配慮することが今後求められるのではないのでしょうか。

#### 同居スタイル

生活を分けると気持ちがくっつく

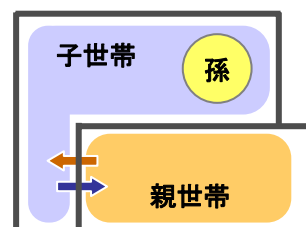
#### 「自立志向」同居



#### 二世帯住宅のあり方

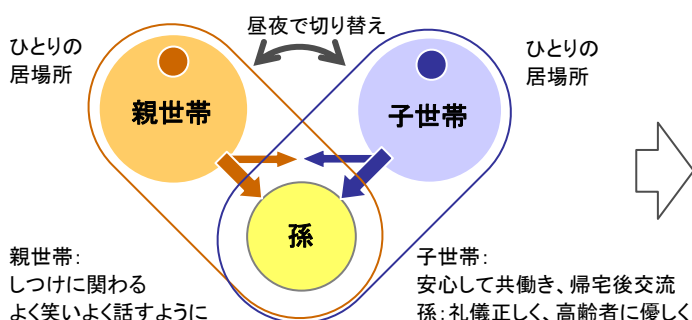
共用部を減らし、動線が干渉しない

#### 世帯ゾーン分離型



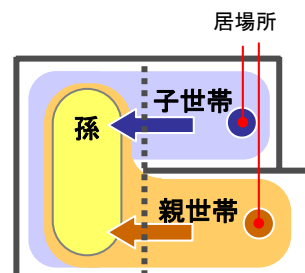
協力しながら、プライバシーを保つ

#### 「孫共育」同居



孫共育ゾーンを両世帯ではさむ

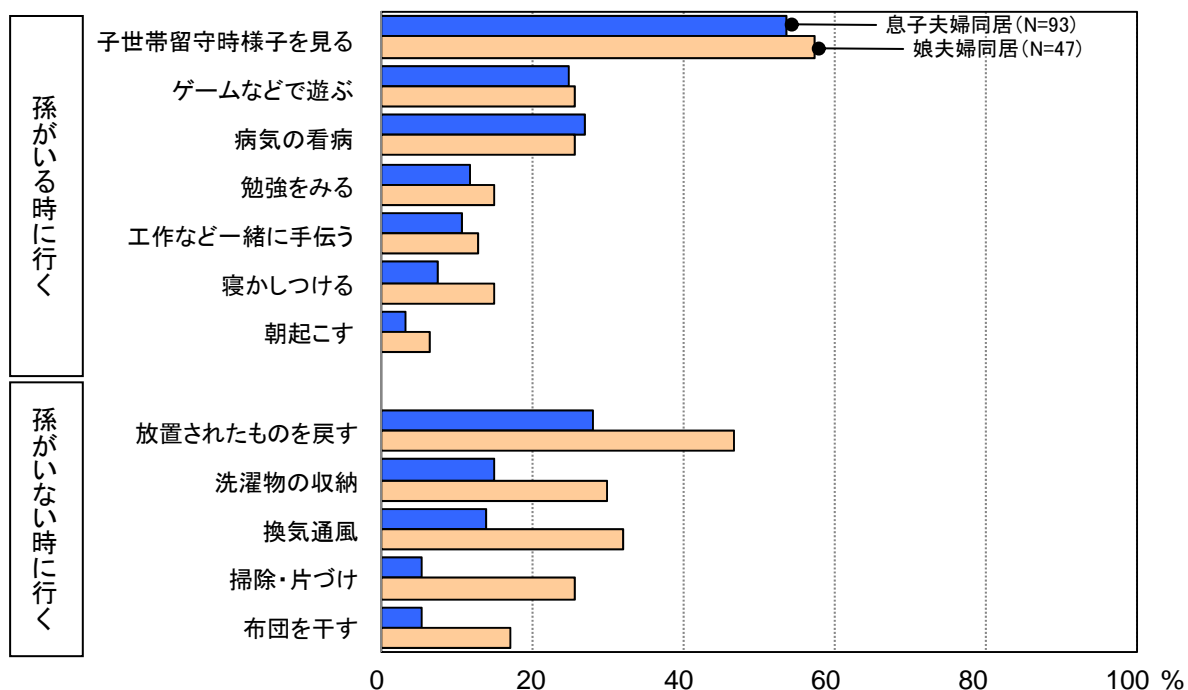
#### 孫共育ゾーン型





親世帯が孫の部屋に行く機会は多く、5割以上で子世帯の留守時に様子を見に行くという回答しています。孫が居る時に行く場合は、息子夫婦同居であっても娘夫婦同居と差がありませんが、孫がいないときにも行く片付けや洗濯などの家事関係では、息子夫婦同居では娘夫婦同居より少ない傾向が見られ、子世帯妻への遠慮が感じられます。

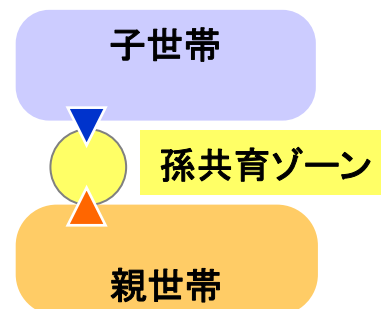
### ■孫の部屋に行く目的(調査C)



### ■孫教育の提案1: 孫共育ゾーニング

親世帯が育児協力のために孫の部屋に行く機会は多いものです。子世帯が留守でもプライバシーが保たれるように、孫の部屋は、親世帯からアクセスしやすい、両世帯の中間に配置しましょう。

特に息子夫婦同居の場合は、子世帯専用ゾーンを通過することなく、親世帯から孫の部屋に行けることがポイントです。



### 3-2. 2×NEST(ダブルネスト)の提案

## 共働き子世帯の孫は昼間親世帯で勉強

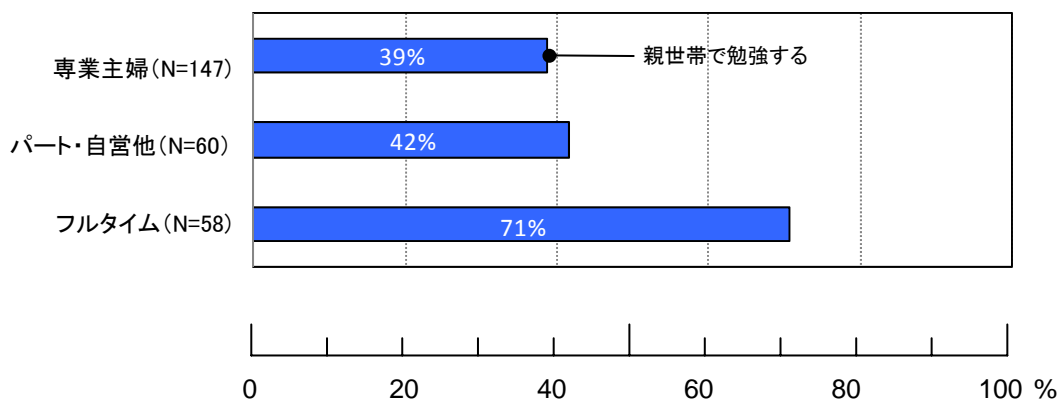
子世帯が共働きで妻がフルタイム勤務の場合は子ども（孫）の方が先に帰宅することになります。こうした場合、子どもはどこで勉強しているのでしょうか。

子どもの勉強場所は、子世帯妻がフルタイム勤務の場合には約7割が親世帯のLDを中心とした空間となり、専業主婦やパート勤務の場合でも約4割が親世帯での勉強をしています。

子育て期のLDKに隣接させて勉強などのために「+NEST空間」を設ける提案は、二世帯の場合親世帯にも必要なことであり、孫共育のための二世帯には「2×NEST」（ダブルネスト）が提案されるべきでしょう。



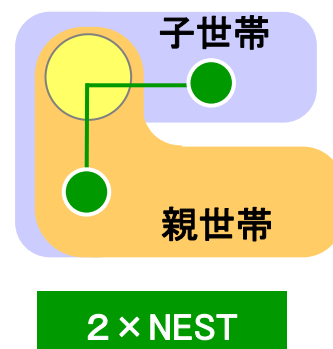
#### ■親世帯での勉強(調査C)



#### ■孫教育の提案2: 2×NEST(ダブルネスト)

子世帯妻がフルタイム勤務の場合、親世帯も孫の勉強スペースとなります。小学生の約7割がLDで勉強している実態を踏まえ子育て期の住まいに提案された+NEST空間は二世帯住宅では親世帯にも必要です。

LDに隣接して設けられ、囲まれ感のある落ち着いたデスクのある空間は親世帯夫婦にとっても快適な居場所となるでしょう。



## ヘーベルハウスの子育て期家族に向けての生活提案「+NEST」

「NEST」とは「巣」という意味です。子育て期家族を対象にした生活実態調査を経て、2009年11月に発売され、多くのお客様からその視点や提案に共感頂き、ご採用頂いています。

### ■+NESTのコンセプト

子育て期の家族は最も生活時間がずれるライフステージであり、家事の時間短縮はもはや限界で、その中で新たにコミュニケーションの時間をつくることは至難の技です。そこで、おもなルーチンワークー食事・片付け・学習・洗濯ーを親子の時間や自立のきっかけにできないかという視点で生まれたのが+NESTです。先4つの行為に関わる空間提案をしています。

### ■プラン例と4つの空間提案

#### ●家族ロッカー



玄関とLDの間に各自のロッカーがある家族共用の収納空間をつくる。放置されやすい靴等を自己管理。

#### ●ペニンシュラキッチン (オープンダイニング)



唯一家族共に過ごせる朝食を親子交流の時間にしやすいよく考えられたオープンキッチン

#### ●室内物干しコーナー

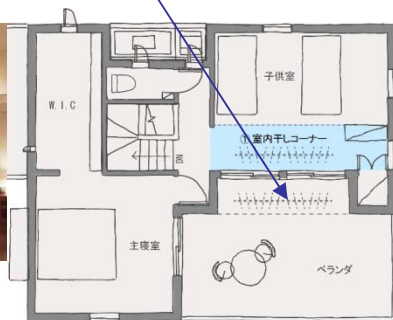


夜洗濯が増えている昨今家族が通る場所で、一時置きや用具の収納もできる専用コーナーを設けることで、気づいた人がする環境づくり

#### ●+NEST空間



多くの子どもがダイニングで勉強する実態・課題を踏まえて、キッチンから見えところに学習コーナーを提案。父と子が交わる場にも

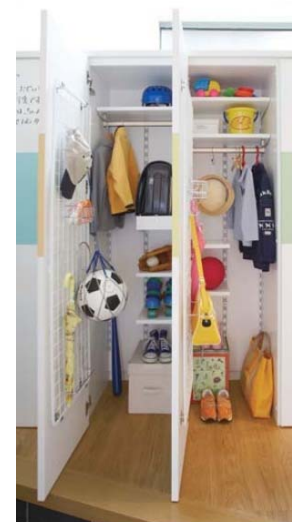


### 3-3. 孫ロッカーの提案

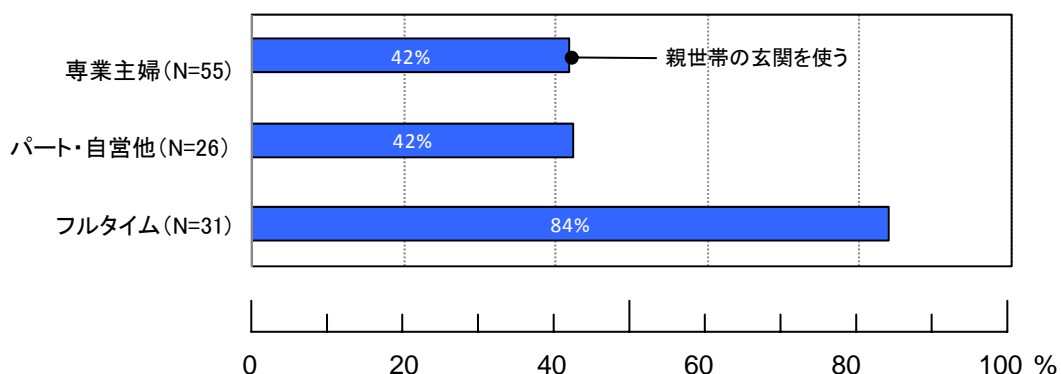
## 共働き子世帯の孫は親世帯に帰宅

親世帯に帰宅してくる孫の持ち物は、どうなるのでしょうか。2階にあることが多い子世帯に置いてから1階の親世帯へと移動するのはかなり難しく、実際には一旦親世帯に置かれているのが現実と思われます。孫の部屋に行く目的で、「放置された孫の私物を持っていく」という回答が上位に入ったのもこの推測を裏付けるものです。

玄関が独立している場合、フルタイム共働き子世帯の孫の8割以上が親世帯玄関に帰宅しています。帰宅時に脱いだ服、ランドセルを置く場所を、玄関近くのスペースに「孫ロッカー」として設けてはいかががでしょうか。



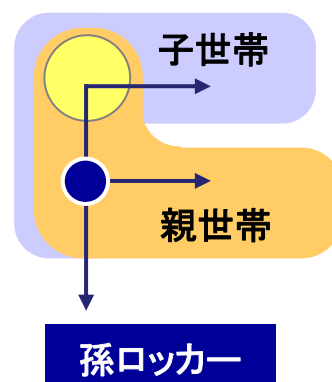
#### ■親世帯玄関を孫が使うとき（調査B: 玄関2つ＝独立二世帯の場合）



#### ■孫共育の提案3: 孫ロッカー

子世帯妻がフルタイム勤務の場合、孫は下校時に誰もいない子世帯ではなく、親世帯に帰宅してきます。そのルートの近くに孫ロッカーを設け、孫の物は自分でしまう習慣をつけさせましょう。

孫ロッカーは子世帯夫婦帰宅後は子世帯からもアクセスしやすくなければなりません。子世帯家族全員が出かける準備をする場所として、家族ロッカーを並べるのが理想的です。



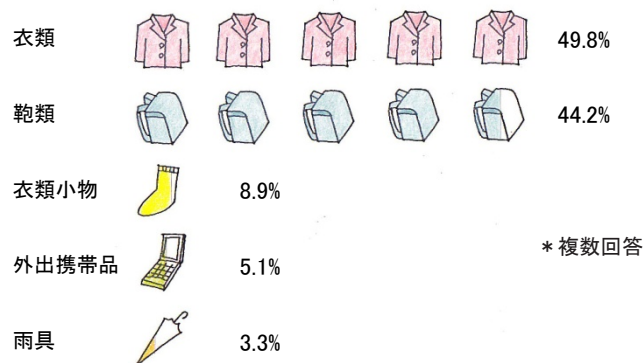
## 「+NEST」における家族ロッカー

「+NEST」で提案された家族ロッカーは、日常の忙しい生活の中で家族のコミュニケーションを図ると共に、LD回りに放置されやすいモノをしまう場所を動線上に配置することで散らかるのを防ぎ、子どもが自立してしまう習慣の生活指導も視野に入れた提案となっています。「孫共育」の二世帯においては、孫に対してこの提案を応用しています。

### ■ 家族ロッカーの生活シーンイメージ



### ■ 子ども・夫の帰宅時に玄関まわり・LDに放置されているモノTOP5



### 3-4 親世帯への加齢配慮提案

## 加齢期への備えにコンパクトバリアフリーを

親世帯の老後への備えは、二世帯住宅共通のニーズです。以前の調査では70代までの親世帯では子世帯の同居家族介護の経験率は約2割に過ぎないのですが、親世帯が80代では約5割、親子同居経験者の7割以上が介護を経験しており、将来の在宅介護対応はかなりの確率で必要になるといえます。

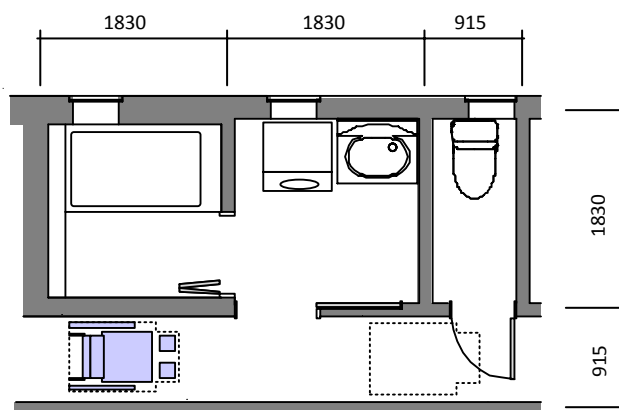
しかし現在は元気であることが多く、その場合具体的な症状を想定しての設計は不可能です。そして不確かな症状への準備として特別にスペースを拡大することも、現実には難しいのではないのでしょうか。

二世帯住宅の親世帯の加齢期配慮設計として、「コンパクトバリアフリー」を提案します。バリアフリー設計は通路や建具のスペースを広げることという先入観を捨て、今までと同じスペースで、または最小限の拡大で加齢配慮を実現するための手法を、3つの提案にまとめました。

#### ■ワンルームサニタリー

##### 一般的なトイレ独立型の設計

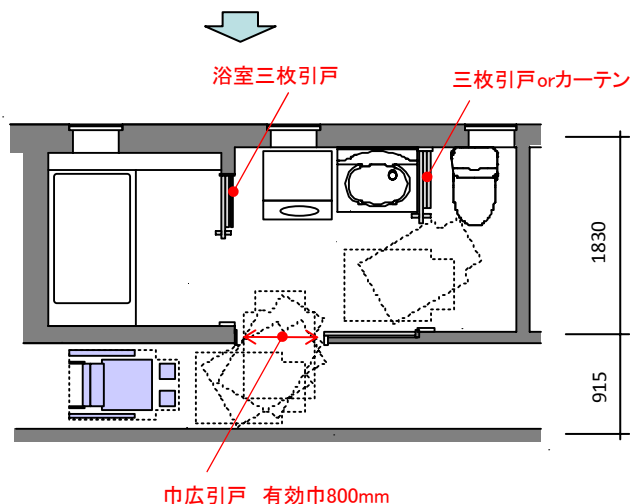
正面から入る一般的なトイレでは、車椅子への対応は厳しいと思われます。トイレの中を広げることも面積の制約から簡単ではありません。



##### ワンルームサニタリー

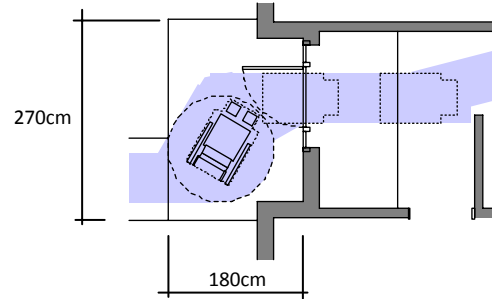
同じ面積でも、ワンルーム化すれば車椅子対応ができるようになります。

出入り口を巾建具にするとともに、間仕切り壁をなくし、三枚引戸に置き換えます。三枚引戸でも広さが足りない場合は建具を外しカーテンに付け替える等に対応します。



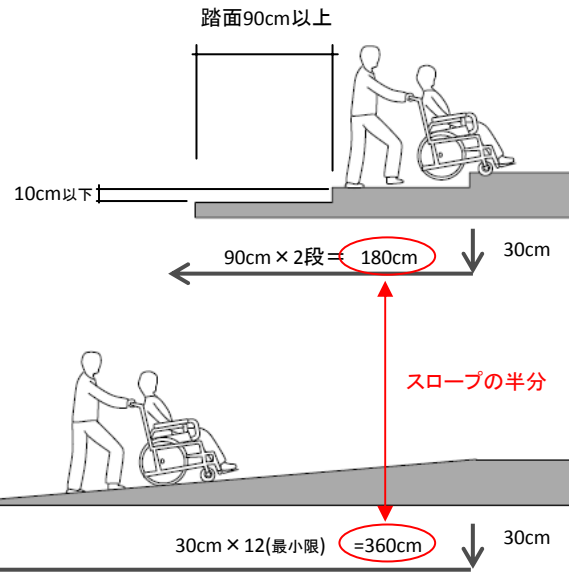
## ■ワイドポーチ

玄関ポーチの広さは、ドアの作動域を避けて車椅子を止め、ドアを開けて正面から直進できるような大きさを確保します。

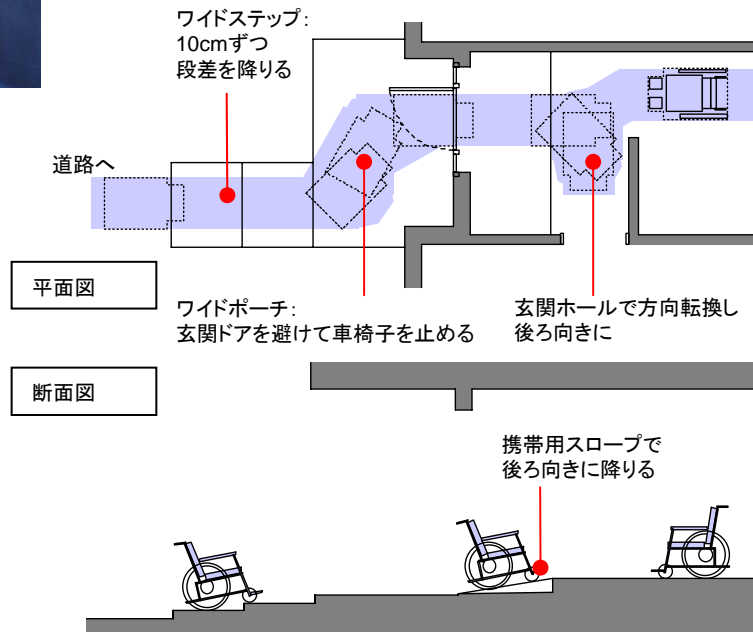


## ■ワイドステップ

玄関ポーチからの階段は、踏面90cm以上、段差10cm以下の緩やかな階段とします。介助を前提とすれば、10cmの段差の乗り越しは容易であり、スロープと比べ、コンパクトであり、スリップしにくく、車椅子が途中で止めやすい点が優れています。

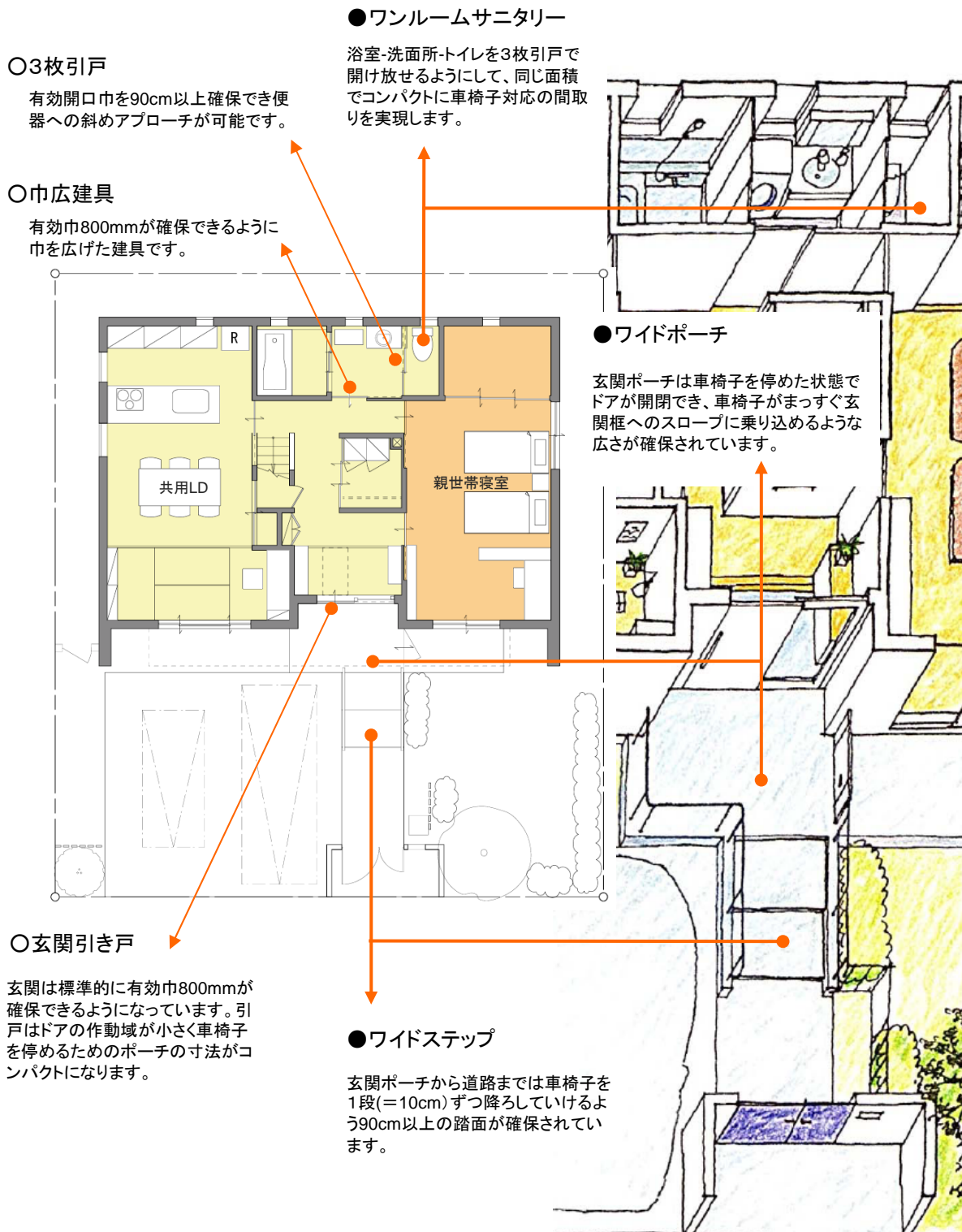


### ●室内-玄関-道路までの車椅子の必要スペースのイメージ



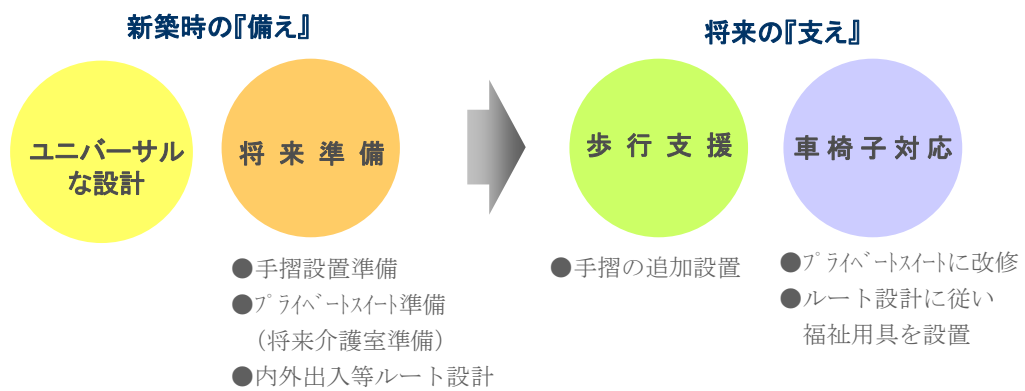
## ■親世帯の加齢配慮

ヘーベルハウスでは、従来より加齢配慮設計システム「AICS」を提案してきました。二世帯住宅の場合、親世帯専用のサンタリーで、車イス利用を含めて使いやすい空間を最初からご提案してもよいと考えました。また、室内の車椅子配慮と共に、玄関アプローチの設計配慮を加えた提案となっています。





ヘーベルハウスでは、生涯ずっと、安心して自立した暮らしをご提供できるように、新築時の『備え』をベースに、身体の変化に応じて、簡易な改修で対応できる「将来の支え」も配慮された 加齢対応設計システム「AICS」を導入しています。



そのAICSの特徴は、4つにまとめることができます。

- ①手摺等基本的なものは、品確法の等級3をベースに標準仕様で設置⇒ユニバーサルな設計
- ②自走車イスで生活(移動)できる巾の建具を選択可能⇒図1 参照
- ③介護が必要な場合を踏まえて、寝室内に専用のトイレ洗面を追加できるように準備配管を提案⇒図2 参照
- ④車イスでの外出を考慮して、必要な通路巾・段差解消機やスロープ<sup>®</sup>の設置スペースを新築段階から計画。必要になったときにそれらを設置して対応することを推奨。

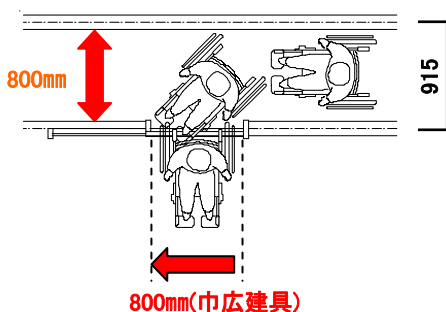


図1 建具巾と廊下巾

HHモジュールでの通常の廊下巾800mmで自走車イスが出入できる建具(有効巾800mm)

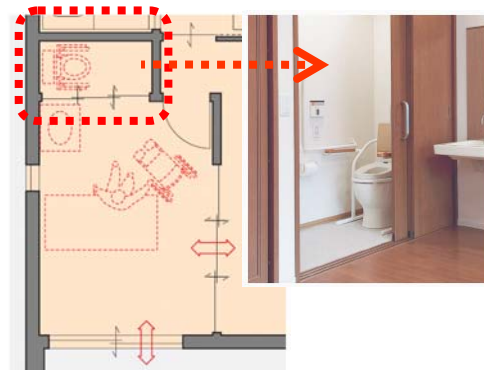


図2 プライベートスイート

将来介護を想定し、トイレ・洗面台設置の配管準備がされた部屋(6帖+物入1帖以上の広さ)

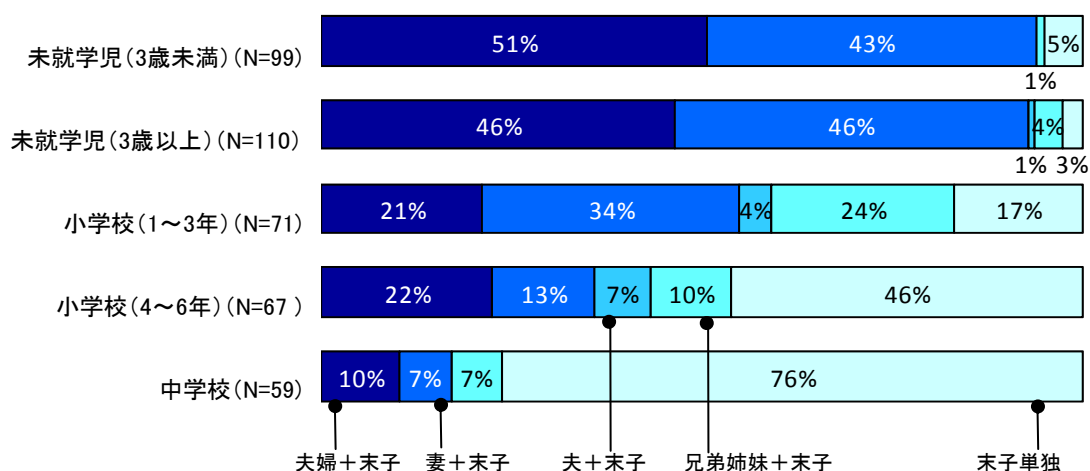
### 3-5. 子世帯への成長配慮提案

## 成長につれ変わる寝方に対応できる可変性を

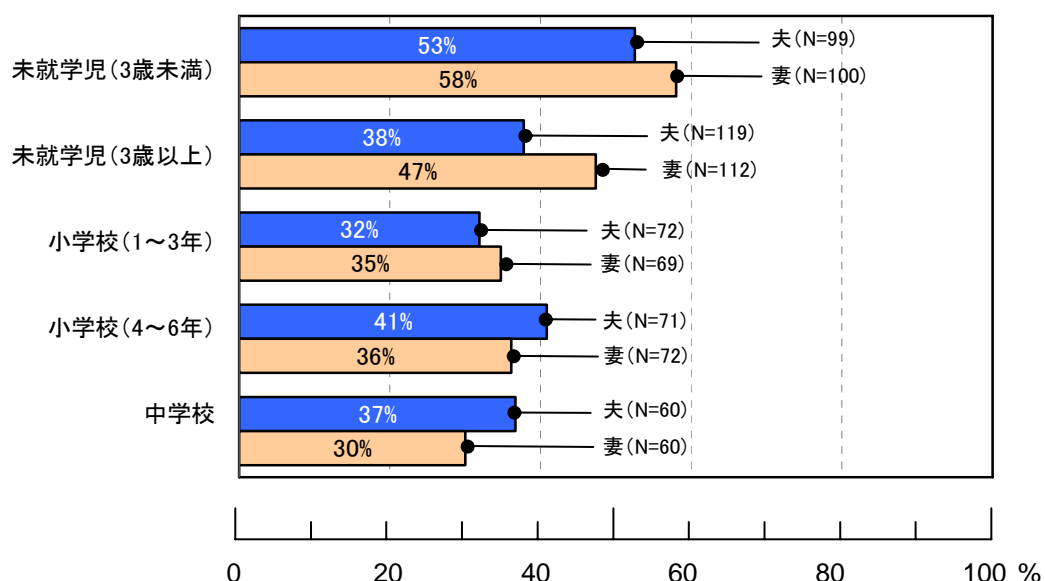
子世帯は幼児期～小学生低学年までは川の字就寝（夫婦＋子）、もしくは妻子就寝/夫別寝のパターンとなります。そして中学生以降は個室就寝へと変化していきます。また、ふとんでの就寝率は幼児期には5割を超えており、次第にベッドへと移行していきますが末子が中学生でも約3割がふとんで寝ています。

幼児期に多い川の字就寝の場所は、現状では主寝室が充てられることが多いようです。川の字就寝できる広さがあり、ふとんが収納できる部屋がそれ以外にない、とも言えます。しかし妻＋子の就寝の場合は、子供室で寝るケースがかなりありました。

#### ■寝方の変化(調査B)



#### ■ふとんでの就寝率(調査B)



## ■ 子世帯の成長配慮

子育て期の寝方に対応するためには、川の字就寝の場所と、ふとんの収納場所の配慮に加え、将来は個室としても使える可変性が必要です。

また、孫共育の二世帯では、居場所はプライバシーが守られる将来主寝室回りに確保したいのですが、寝る場所とは別にスペースを確保するのは難しいことが多いでしょう。

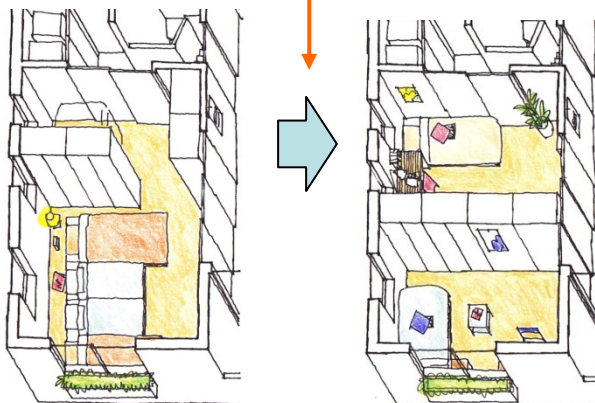
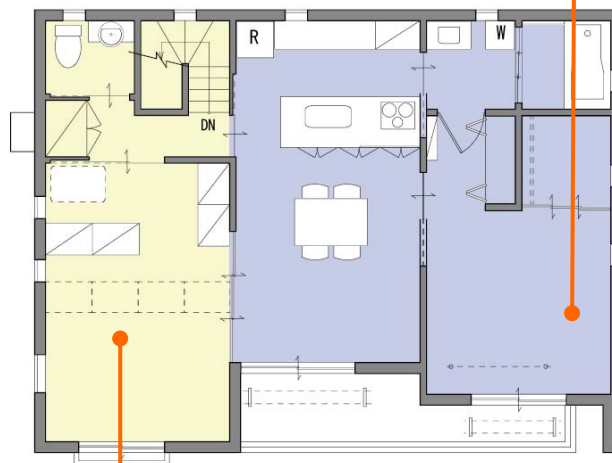
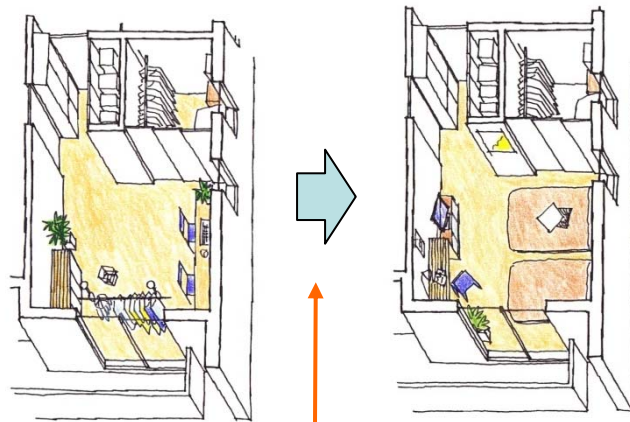
川の字就寝の場所を可動間仕切りを用いた子供室とすれば、将来主寝室を夫婦の居場所として充実させることができ、妻子-夫の別寝にも対応しやすく、フレキシビリティの高い間取りになります。

### ● 主寝室の変化

主寝室はこどもが小さいうちは室内干しスペースとすると同時に、夫婦の書斎として使ってはいかがでしょうか。

こどもがひとりで寝るようになったら、ベッドを並べて主寝室らしくなります。

3枚引戸のクローゼットは開口が大きいのでふとんがしまいやすく便利です。



### ● 孫の部屋の変化

こどもが小さいうちは川の字で寝ることが多いでしょう。間仕切り収納で布団置き場をつくれれば、すっきりとします。

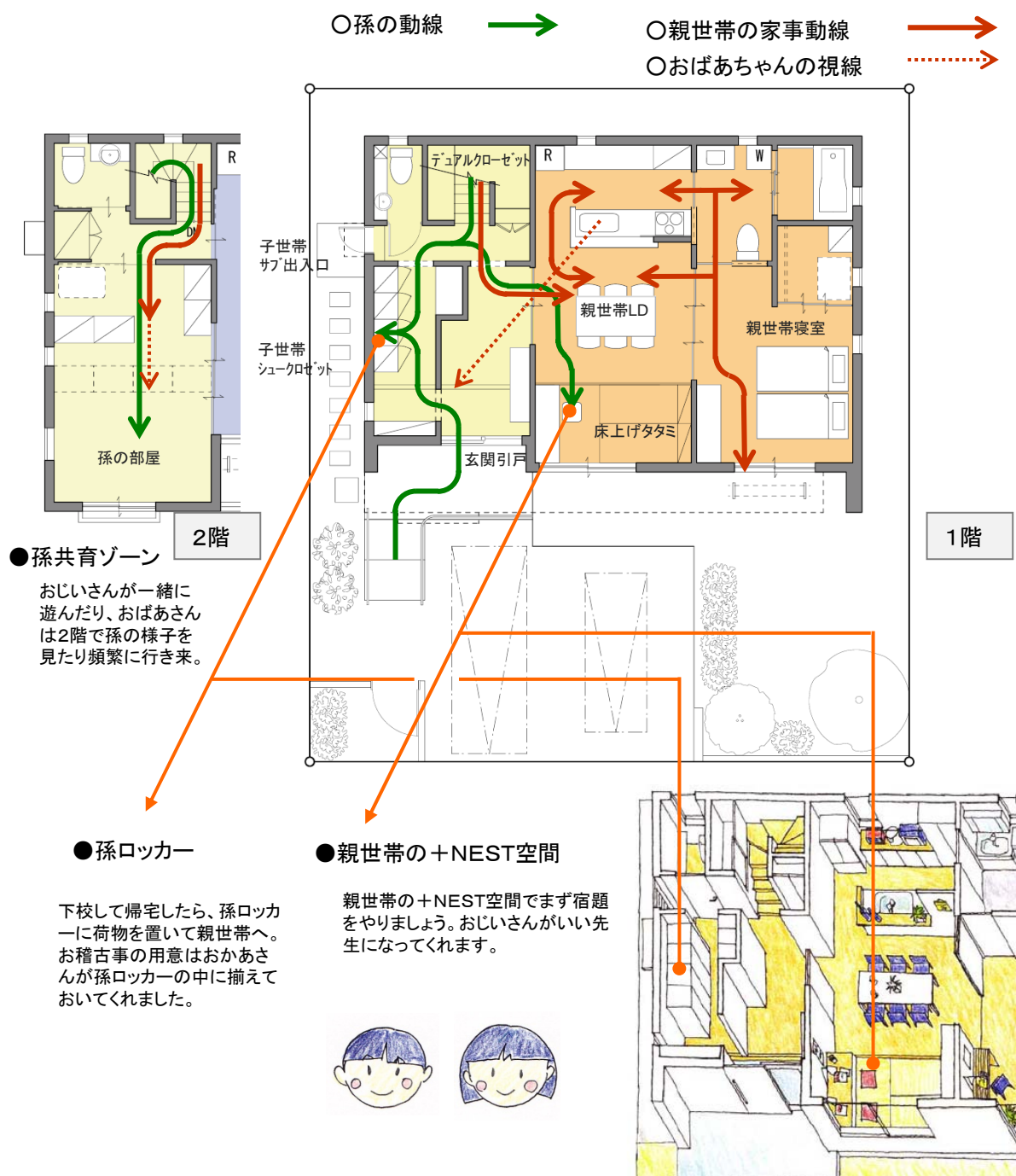
こどもがひとりで寝るようになったら、可動間仕切り収納を点線の位置に動かして、個室をつくれます。

### 3-6 息子夫婦同居プランニング例

## 孫共育と子世帯専用ゾーンの両立

#### ■ 子世帯留守時の親世帯と孫

共働きの息子夫婦同居を想定した、玄関以外はすべて別の共用二世帯のプランです。子世帯が留守の昼間は、親世帯の祖父母と孫で一緒に過ごします。2階の孫共育ゾーンに親世帯が行くことは多いのですが、子世帯専用ゾーンには立ち入らないよう配慮しました。



## ■ 子世帯の帰宅後

共働きの子世帯妻が帰宅後は、子世帯家族の夕食準備があわただしく始まります。この時間から孫はおかあさんと一緒に遊んでいる様子に目が届くよう、リビングと子供部屋の間は開け放せるようになっています。

○ 子世帯内の家事動線



○ おかあさんの視線



● 世帯ゾーン内の家事動線

夜洗濯が多いので、キッチンに隣接したコンパクトな家事動線が便利です。子供部屋を川の字で寝る部屋にして、将来の主寝室が室内干しをする部屋と、役割が分けられています。

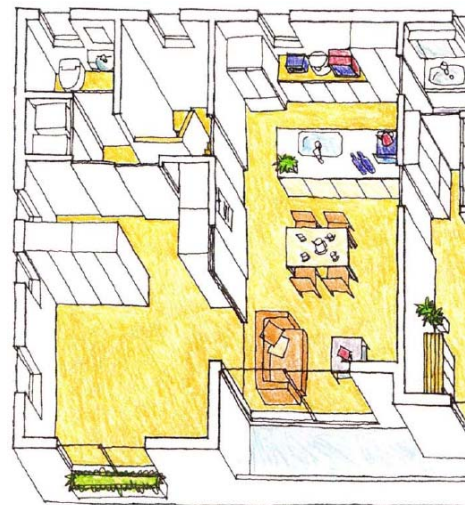
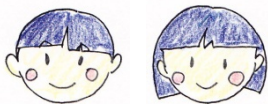


- 親世帯専用ゾーン
- 孫共育ゾーン
- 子世帯専用ゾーン

2階

● +NEST空間

子世帯の+NEST空間は、リビングダイニングに隣接させた子供部屋です。子供部屋がLDと同じ階に取れるのは二世帯ならではのメリットです。



### 3-7. 娘夫婦同居プランニング例

## 家事集約と家族の居場所の両立

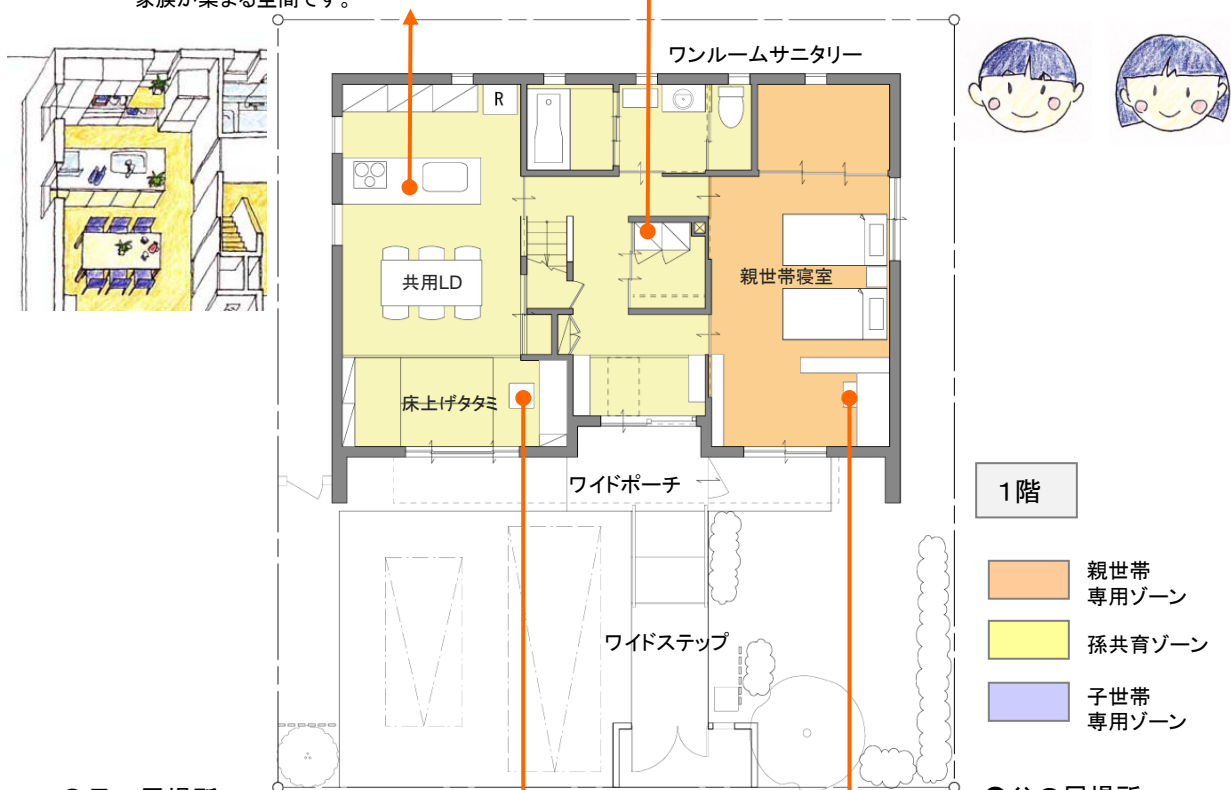
娘夫婦同居・共働きで融合二世帯のプランです。夕食の準備や洗濯は母に集約され、子世帯の妻は仕事に専念できます。家族が集まる場所と共に、一人ひとりの居場所を考えたプランになっています。

#### ●両世帯共用のキッチン

家族全員が囲んで参加できるペニンシュラキッチンに、大きなダイニングテーブル。家族が集まる空間です。

#### ●孫ロッカー

孫のモノはここに置きます。子世帯用のコートクロークにもなっています。



#### ●母の居場所



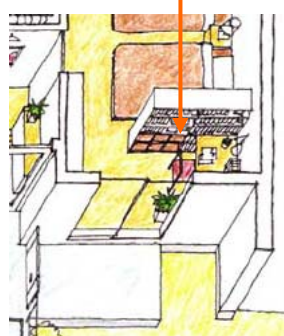
床上げ和室で趣味の手芸を  
開いているときは+NEST空間として孫が使います



#### ●父の居場所

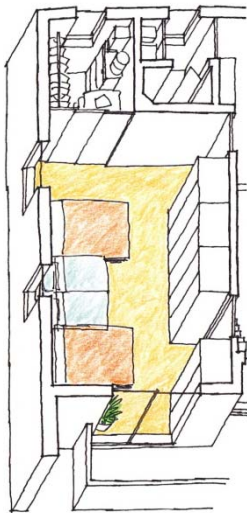


親世帯寝室のコーナーで好きなTVを



●川の字就寝の場所

家族が川の字で寝られる広いスペース  
 昼間は遊び場に、成長したら点線位置  
 に間仕切り収納を動かして仕切ります



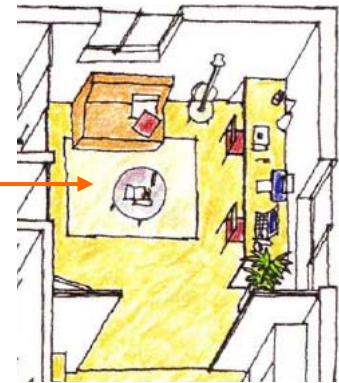
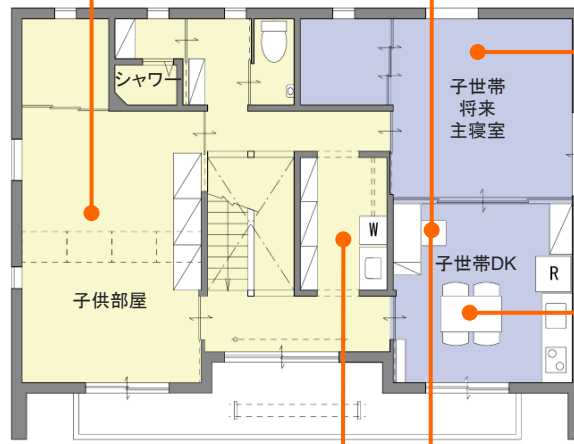
●妻の居場所

子世帯DKでちょっとメール  
 や書き物



●夫の居場所

将来の主寝室で趣味やパソコン



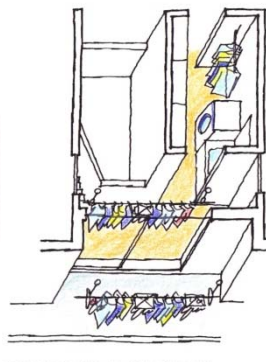
●孫共育ゾーニング

親世帯が入るのは孫共育ゾーンだけ。  
 子世帯専用のゾーンには入らないこと  
 にしています。

●ランドリーセンター

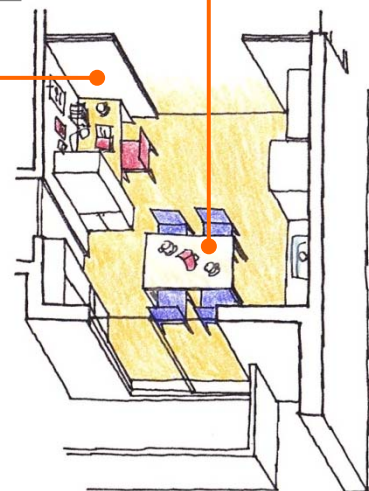
家事集約を象徴する  
 屋の間におばあちゃんが  
 洗濯しておいてくれた衣類を  
 しまうコーナー

窓際には室内干しスペースが



●夫の食事場所

夕食が遅いときは親世帯  
 を煩わすことなくここで。  
 ここではお父さんがいちば  
 んえらい。



調査報告書執筆者:

旭化成ホームズ株式会社　くらしノバージョン研究所  
所長　熊野 勲

旭化成ホームズ株式会社　くらしノバージョン研究所  
主席研究員　松本 吉彦

旭化成ホームズ株式会社　くらしノバージョン研究所  
主幹研究員　入澤 敦子

## 二世帯同居における「孫共育」

家事育児協力のための新しい Nice Separation

### 調査報告書

---

発行： 2010年4月22日

発行所： 旭化成ホームズ株式会社

くらしノバージョン研究所

二世帯住宅研究所

〒160-8345 東京都 新宿区 西新宿 1-24-1 エステック情報ビル

電話 03-3344-7045

ver. 2.0 (100514)